

# 東方墓石録

甲光一念

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

認めてほしい、見てほしい、話してほしい、関わってほしい、助けてほしい、止めてほしい、驚いてほしい、死なないでほしい、一緒にいてほしい。

幻想郷の少女達はどう生き、どう死ぬのか。

誰の死を見て、何を学び、何を悟るのか。

人と妖は、寿命を同じくすることは無理なのか。

己の望みを叶えてくれる者は、現れるのか。

理不尽はいつだって、唐突にやってくる。

鈴奈庵と茨歌仙に関するネタを馬鹿みたいに乱用します。

キャラの死がメインになります。

墓石録ですしね。

自己解釈多め。

# 目次

永遠、そして悔い 『鈴仙・優曇華院・イ

ナバ』

1 必死

2 放棄

3 不見

4 温度

離別、そして忘れ 『茨木華扇』

1 追想

2 懊惱

3 正誤

4 安堵

5 離別

交流、そして空け 『アリス・マーガトロ  
イド』

1 人形

2 約束

148 143

131 116 100 70 64 51 31 7 1

# 永遠、そして悔い 『鈴仙・優曇華院・イナバ』

## 1 必死

永遠亭。

月より出でた永遠を生きるものが住まう屋敷。

蓬萊山輝夜。

八意永琳。

月の姫とその従者。

永遠亭に住まう他の者は兔だ。月で玉兔として存在していたが、その月から逃げ、身も心も地上に落ちたと公言する、名実ともに地上の兔。

鈴仙・優曇華院・イナバ。

月より逃亡した兔——そして、そこを永琳に救われた兔。

恩義ゆえか、それとも純粋に惚れ込んだのか、鈴仙は永琳のことを師匠と呼ぶ。薬学に関しての師匠であり、地上での生き方を教えてくれた存在でもある。

彼女はいつだって追いかけている。師の背中を追いかけている。

だからこそ、彼女は何の脈絡もなく、何の前触れもなく、ふとこう思う。

思ってしまうし、考えてしまう。

きつとそれは、思っても考えても、僅かばかりの意味も生じないことだ。

鈴仙本人もそれはわかっていて、しかし、抱かずにいられない。

果たして自分は、ほんの少しでも、ほんの一步でも、ほんの須臾ほどでも、目の前の師匠に近づくことができているのかと――。

「……………」

嫌な夢を見た気がする。見たくもない、迷惑にしかならない、心の底から不愉快な夢。痛くない頭に鋭い痛みが走った気がするが、おそらくは気のせいだ。何の夢を見たのかも覚えてないのに、それに対して酷い既視感を覚える。昔の夢でも見たのか、それとも見た気がしてるだけなのか。

どちらでも一緒だと結論付け、布団からむくりと起き上がる。体を起こした瞬間、布団の中に外気が侵入し温かかった体に震えが走るが、この時期はそんなことを気にしてはまともに動くことなど出来ない。

(師匠はもう起きてるんだろうな……)

起きるといふより、永琳は不老不死なのでそもそも寝る必要がない。彼女が寝ているのは、普通の人間と同じような生活のリズムを作ることでは何かを理解できるかもしれないといふ、よく言えば知的的好奇心、悪く言えば娯楽の一種だった。

不老不死。

それこそが今、鈴仙を悩ませていることの一つなのだが。

強張る身体を強引に動かし、布団から立ち上がる。筆筒から着替えを取り出し、服を脱いでいく。

通常、生物というのは生まれた瞬間から死に向かつていく。体を構成している細胞の自壊——自殺の機構、アポトーシスというらしい。身体を良い状態に保つための機能なのだが、生物の肉体は無限に細胞を作り出せるわけではない。故に、生物は死ぬのだ。

いつか、必ず死ぬ。

これは鈴仙が永琳に教わった知識のうちのひとつだ。人里の人間の誰一人として知らないようなことを永琳は無限とも思えるほどに知っている。だが、きっと自分はまだ、師匠の知識の十分の一も学べていない。自分が新しい知識に目を回している間に、八意永琳は更に新たな知識を獲得しているのだろう。

鈴仙が立ち往生していても、永琳は立ち止まらない。

いや、鈴仙が往生したって、ひよつとしたら——。

憂鬱な気分のまま着替え終ると、襖を開けて廊下に出る。物音一つしない静寂に包まれた屋敷をなるべく床を軋ませないように進んでいく。さすがにこれだけ長く住んでいれば物音を立てない歩き方の一つや二つ身につく。住み始めた当初はおっかなびつくり歩いて、結果余計に床が軋んだものだ。

廊下を少し進むと庭に出る。結構な割合で庭には兔がいるのだが、今日はいない。そしてそれは庭を見れば一目でわかった。

(あ……、どおりで寒いと……)  
雪。

ばらばらと雪が降っていて、庭一面にそれが積もっていた。十二月現在それは別におかしくもない光景ではあるが、昨日の方が寒かった気がする。雪が降っている今日より、降っていないなかった昨日の方が寒かった気がするというだけなのだが、なんだか変な感じがした。

「綺麗だな……」

いつの間にか、そんな言葉が口から零れていたのに一番驚いたのは鈴仙本人だった。他に誰もいない以上二番目に驚いた人物などいないが。雪なんて、もう見飽きたはずだった。今更、こんな景色に感慨を抱く要素などないはずなのに。

周りを見渡して誰もいないことを確認した鈴仙は安堵の溜め息を吐いた。別に聞か



れて何かしらの不都合がある発言ではなかったけれど、なんとなくではあるが、誰かに聞かれない言葉ではなかった。自分の言葉は自分だけのものであつてほしい。よくわからない欲求ではあるが。

庭に面している廊下を歩くと台所に辿りつく。基本的に永遠亭の住人の食事は鈴仙が作っている。永遠亭の雑用を一人でこなしている鈴仙の仕事の一つだ。別に過密スケジュールというわけでもないの、それなりに時間にはゆとりがあるが。

壁に掛けてある時計を見ると、時刻は六時過ぎを指していた。永琳はもう起きているだろうけど、輝夜とてみはおそらくまだ寝ているだろう。

欠伸を一つして、料理に取り掛かる。

頭が痛い気がする。気がするだけだ。そんなことは自分自身でもわかっている。わかつているが、振り払えない。それもまた、明確にわかっていることだった。

不満はない。しかし満足もない。だからと言って不足があるわけでもない。

悩みというのは人の頭に深く深く根を張る。隙間だったはずの場所は根で埋め立てられ、いつの間にか悩みは頭の空白を埋め尽くすことになる。雑草と同じだ。見えてい

る部分を引っこ抜いただけでは、また根から悩みは湧き上がってくる。

満ち足りないのに、足りないわけではない。

物事に根本的解決があり得ないということ、鈴仙自身もなんとなくわかつていて、

だからこそ悩まずにはいられない。悩まなければ、悩んでいなければ、世界に自分だけが取り残されてしまうような気がして。

最近、彼女自身、自分が何を考えているのかわからなくなる時がある。

思考がいつの間にか堂々巡りしてしまっているなんていうのは最近では珍しくもない。

包丁で豆腐を切りながら、考えが固まる。

今自分が何を考えていたのかが全て吹っ飛んでしまったのだ。別に今更それに狼狽えるようなことはない。もうそんなには慣れている。はあ、と、一つ溜め息を吐く。どうでもよくなった。投げ槍になって、正気ならば絶対に言わない言葉が、口から漏れた。

「——なにしてんだろ、私」

そう言いながらも手を止めることはなかった。

自分が今、なにをしているのかわからなくとも。

自分が今、すべきことはなのはこれだとわかっていたから。

## 2 放棄

鈴仙・優曇華院・イナバという彼女にとって、本来地上とは縁のない場所である。あつたはずだ。だが彼女は今確かに、穢れに塗れた地上に住んでいて、身も心も地上に降りてきた地上の兎だと公言している。だが、彼女だつて時折ふと思うのだ。本当に自分は、地上の兎になれているのだろうか。

因幡てゐという根っからの地上の兎との交流もあり、地上に慣れた兎だという自覚はある。自分自身がもう月の兎ではないという自覚もある。だが、どっちつかずなのではないかという疑念が、どこまでも彼女を苛む。中途半端であり、中途半端でしかなく、自分の存在に対して断言ができない。

否定が怖い。

八意永琳の弟子である。

因幡てゐの友人である。

永遠亭の雑用係である。

地上に下りた兎である。

月都を捨てた兎である。

幻想郷に住む妖である。

人里での薬売りである。

自分の情報を列挙しても、それが自分自身であり、誰にも否定されない自身の存在証明であるという確信が得られない。それを口にした瞬間、いかな真実も瞬時に虚構になり果てるかもしれないという危惧がどうしても拭えないのだ。誰かに自分を否定されるのがどうしようもなく恐ろしい。

自分が自分だと信じている自分を他人に否定されるのは彼女にとってどう足掻いても耐えられない苦痛だ。誰かに話す必要はないと思つていても、誰かに話さない自己完結は結局自己満足でしかないのではないか。他人に嘘を吐いていることと同義なのではないか。そしてそれは、責められるに値することなのではないか。何の根拠も確実性もなしに他者から存在を認めてもらえるものなどいるはずがないという思考が、今の彼女を支配している。

姿の見えない誰かに後ろから脅かされている気分だ。延々と——永遠と。あらゆる存在は周囲からの観測によつてその存在を保っている。誰からも認識されないモノは存在していないに等しく、そしてそれは自分では覆すことができない。

自己肯定だけでは足りないのだ。

自己肯定だけでは無意味なのだ。

自己肯定に加えて、他者からの肯定があつて初めて、その存在は認められる。だからこそ、自身が空つぽだと思つてしまうのかもしれない。誰に肯定してもらつていないのかもわからないまま、誰に認識されているのかもわからないまま、ただただここに存在し続けているというのだから。

自分で自分を肯定できているかどうかの、自信も持てないままに――。

「ねえ、てゐ」

「……なにさ、どうかしたの？」

「うん……、あのさ、私つて兎だよね？」

迷いの竹林を並んで歩きながら、鈴仙が急にしてきた質問にてゐは戸惑つた。その様子を鈴仙に見せることはないが、質問の意図が読めなかつたのはてゐにとつては珍しいことではあつた。普段の鈴仙は単純で、澆刺で、そして元気で、だからこそ何を考へているのが非常に読みやすい。

決して短くない時を生きている因幡てゐにとつて、ある意味それは新鮮ではあつたのだが。

「そりやあ兎でしょ。それ以外に一体何だつていうのさ。なに、人間にでもなりたくなつた？」

「……………いや、そういうわけじゃないんだけど」

変な間を開けられたせいで一瞬だが、もしかして凶星を付いてしまったのだろうかという恐怖が湧いたが、否定の言葉が出てきて安心した。ただ、一瞬とはいえ、鈴仙が間を開けたのは事実であり、その間に何を考えたのかは、てゐにはわからなかった。

「煮え切らないなあ。自分が兎かどうかに自信がなくなるってどういうことさ」  
「……どういふことなんだろうね。私にもわからないや」

てゐの少し厳しめの言葉に、鈴仙は特にテンションを変えることなくそう返す。普段の鈴仙だったならば、もう少し激しめに言い返してくるはずなのに。そういうやり取りを期待していた節もないではなかったのだが、こういう反応が返ってくると心配というより不安という側面が強い。精神的に不安定になるとてゐの立場としても大分困るのだ。

戦闘のセンスに関しては永琳にすら一目置かれている鈴仙だ。月から逃げ出してきた当初の時のような状態にでもなられば、てゐとしては打つ手が無い。弾幕でも敵わないのは試さずともわかつているのだから。いたずらとなれば話は別だが。

「ねえ、てゐ。永遠って、なんなのかな？」

鈴仙のそんな言葉に、てゐは一瞬だけ黙り、しかし特に悩むことなく答えた。

「終わらない、ってことでしょ」

「終わらない……」

「いつまでも続くっていうのとはまた別だよ。始まったものには例外なく終わりがあ  
るはずだけど、永遠にはそれが無い。……ていうか、その質問は要するにお師匠様と姫  
様のことを言ってるわけ？」

しよぼくれた鈴仙が具体的に何を考えているかはわからないが、永遠という言葉がそ  
の二人を指している言葉であろうことはなんとなく伝わってきた。そもそも隠し事が  
下手なのに、そのうえ隠す気もないのでは、もうほとんど自分からばらしているよう  
なものだ。

なんとなく、特に大した理由があるわけではないが、本当になんとなく、そういう態  
度は気に入らない。勝手なことを考えているのはてゐだつて自覚している。だがそれ  
でも、今の鈴仙は見ていて楽しいものではないのだ。

「んー……、まあね。永遠を生きるっていうのはどういう気分なんだろうなって、ちよつ  
とだけ気になつちやつたの。別に私が永遠に生きたいわけじゃないから、そこは誤解し  
ないでね？」

「しないよそんな誤解。私が言いたいののは、あんまりしよぼくれた顔していると葉なんか  
売れないよつてこと。またお師匠様にお仕置きされても私は知らないからね」

「もー、相変わらず冷たいんだからー」

少しだけ微笑んだ鈴仙を見て、てゐは心の中で頭を抱える。なんで自分はこんな言い

方しかできないんだろう。どうして普通の心配する言葉をかけてあげることができないんだろう。ただ一言、なんだか元氣ないみたいだけど大丈夫かと訊くだけだろう。

柄じゃないとか、恥ずかしいとか、思春期の人間じゃあるまいし、何をいまさらどうでもいいことで悩んでいるのだ。正直に心配してあげることもしかないのか、この捻くれ者は。

因幡てゐにとつて、鈴仙は、立場も違えば境遇も違う、共通点なんか種族と住処ぐらいのものでしかない鈴仙を、しかし実際かなり慕っている。友人だと思つている。でもだけど、自分は今まで鈴仙のためになることを何かできただろうかと考えると、何も思いつかないのだ。元氣がない時にいたずらを仕掛けて無理に元氣を出させたりはしたが、それに鈴仙が感謝しているかと言えば大分怪しいだろう。元氣がないところにいたずらを食らえば、誰だつて不愉快になる。

でも、それしか出来ない。

いや、それしか知らない。

なにをすれば元氣になつてくれるかなんて、てゐにはとんと見当がつかない。もつと真つ当な手段で元氣づけてやりたいのに、それができない。毎回、自己嫌悪に陥るのだ。負の連鎖もいところである。

自分のこんな言葉なんかで、さつきまで沈んでいた顔に笑顔を浮かべることができる鈴



仙は、自分なんかよりもよっぽどよくできている。だが、てゐにその気持ちをも鈴仙に伝える手段はない。何かを言おうとしても喉の手前で引つ込んでいつてしまう。

自分の勇気の無さにほとほと嫌気がさす。物事を先延ばしにしたって、事態が好転することなどほとんどないというのに、それを理解しながら一步前に踏み出すことができないでいる。

本当に自分は、長く生きてるだけで、何も積み重ねることができていない。

「てゐ、聞いてる？」

「え？ うんうん。聞いてる聞いてる。好きな男が出来たんだったって？」

「言つてないわよそんなこと！ 聞いてないなら聞いてないって素直に言いなさいよね。人里に美味しい甘味屋を見つけたから今度一緒に行かないかって話なんだけど。どう？」

「いいよ、気が向いたらね」

鈴仙から誘ってもらうことはあつても、てゐの方から何かに誘つたことなど数えるほどしかない。しかも大抵はいたずらを仕掛けるためなのだから本当に救えない。自分も救えないし、鈴仙も救えない。

人間を幸運にする程度の能力——役に立たないとは思わない。だが、人間だけなのだ。巫女も、魔法使いも、メイドも、風祝だつて幸運にできるのに、妖怪を幸運にする

ことはできない。

幸せまでは求めない。せめて、せめて、少し前までの普通。それだけでいい。それだけでいいのに、それがあまりにも遠い。

隣を歩くこの友人は、いつか自分がどれだけ手を伸ばしても、どれだけ追いかけても追いつけないような存在になってしまふのではないか。そんな危惧が払えない。

そしてきつと、彼女が進んでいる道は、決して平坦でも安全でもない。断崖絶壁に通じていて、それでも躊躇なくどんどん歩いて行つてしまふ。危ういのだ。どうしようもないぐらい。背中を押したら一瞬で姿が見えなくなつてしまふそうなくらいに。

初めて会つた時から、こうだつただろうか。今となつてはもう思い出せない。彼女はこんなにも、自分の感情を隠すのが上手だつたか。昔はもう少しだけだが、なにを考えられているかを理解することができた。顔にすぐ考えていることが出た。

もう、鈴仙の顔から感情を読み取ることは不可能に等しい。

「……だから、師匠はもう少しでいいからわかりやすく説明してくれてもいいと思うのよ。別にわかりにくい説明つてわけじゃないんだけど、回りくどいっていうかなんて言うか……」

「……あんまり愚痴ばっかりこぼしてるとまた怒られるかもよ。お師匠様、どこで聞き耳たててるか分かつたもんじゃないんだからさ。こないだだつて人里になんか配つて

怒られてたじやない」

「鼠除けのあれ？ まあ、あれはちよつとやりすぎたかなつて若干自分でも思うけどね……」

耳を垂らす彼女は、いつから自分に愚痴をこぼすようになったんだつたか。何回か、その愚痴の内容を永琳に告げ口したことがある。当然というのもあれだが、鈴仙はその後、決して優しくも易しくもない折檻を食らつていた。なのに。

愚痴を漏らす相手はてゐなのだ。

それにきつと、てゐ以外にはそんな素振りも微塵も見せていない。

自分は師匠を尊敬している。師匠は非の打ちどころのない完璧な方だ。あの人の近くにただで勉強になる。あの人の傍にすることを選んで正解だつた。あの人の近

きつと彼女はそう言っているし、そう思っている。心の底からそう思っているはずなのに、時折、彼女の心の穴からちらりと黒いなにかが顔を出す。それはきつと自分自身でさえ認識していない気持ち。表に出すべきではないと見た者に否応なく思わせるなにか。

てゐではその穴を埋めることはできない。ある日、何の前触れもなくぽつかりと開いたその穴は、ただその中の暗闇を映し出すだけだ。その穴からは何も出てこない。

いつの間にか、彼女はあまりにも空虚だつた。

「でも、里での葉の売り上げはちゃんと上がったもん。それに、あのくらいのお仕置きなら慣れたもんよ」

「……懲りないねえ」

考えてはいけないのだ。

今、彼女が浮かべている笑顔が、どれほど薄っぺらいかなど。

八意永琳は椅子に座りながら頭を抱えていた。月の頭脳と称された彼女はこれまで的人生において、悩む、や、行き詰まる、といった経験が全くと言っていいほど無い。故に、自身ではどうしようもない事態に異様なまでに弱かった。不測の事態や出来事、その全ての事柄をパターンで片付けてきてしまったからこそ自覚できなかったアドリブ力の圧倒的欠如。

常にフラットであるはずの彼女のメンタルは、珍しくダウンと化していた。

今はまだ本気出していないだけというのは簡単だが、彼女が今直面している問題は永琳が全力で当たっても解消も解決もすることができない類の難問だ。それを痛いほど痛感しているからこそ比喩でもなんでもなく永琳は頭を抱えているわけだ。

相談相手が欲しい。

そんなことを思う。

自分では対処できる物事が有限だという自覚があり、このままでは思考を巡らせても不毛が過ぎる堂々巡りにしかならないことが明白すぎるという考えの末に出た、永琳にとってはこれ以上ない画期的なアイデアだった。

流石は月の頭脳ねと、自画自賛してしまいうくらいには。

天啓が下りてきたのかと、一瞬とはいえ錯覚するほど。

しかしあくまでも彼女はナルシストとかではない。そう思ってしまったても仕方ないくらいに考えて考えて脳みそをフル回転させてようやく出た奇跡的なひらめきだという自負があつてのそれなのだ。

誰かに相談するというのは人間としては当たり前で、しかも女性ならばなおさらその傾向は強いはずなのだが、誰かに相談し共に答えを導き出すという誰もが経験したことのあるプロセスを彼女は知らない。

個人が集団に匹敵する場合にどうしたって起きてしまう、一般的な人間関係の齟齬と  
いうか。

お嬢様が庶民の暮らしを知らないみたいなものだと思えば、少しは可愛く見えないだろうか。

だが、またもや彼女の前には大きな壁があった。自分のこの悩みを相談するのに最も適しているのは、果たして誰なのかという決まった答えのない問い。そもそも本当に答えがあるのかもわからない。

誰かを頼るという行為そのものに不慣れなのはまあ仕方がないとしても、誰を頼ればいいかわからないという先行き不透明な状況が永琳は苦手だった。

自分で問題に対しての答えが出せない。ならば誰かに相談しよう。しかし自分に分からないものが誰かに分かるものだろうか。やっぱり最も答えに近いのは自分なので。だが自分ではいつまでも答えが出ないという答えがもう出てしまっている。じゃあ、いや、でも。

いつまでも終わらない階段を上っているかのようなパラドックスが永琳の脳内で形成されては崩壊するを繰り返し、蓬萊人でもなければ脳神経が焼き切れてもおかしくないレベルの袋小路に迷い込んでしまっていた。こんなに脳を酷使したのはいつぶりだろうか。

彼女にとって、自分と輝夜以外という括りで纏められたその他大勢に、こんなに頭を使うことになろうとは。月からこの幻想郷へ来たばかりの頃は想像すらしていなかった。

自分は輝夜のために生き、輝夜のために死なない。

それだけだったのだが。

「……お師匠様があんなに悩んでるの、私初めて見ました。月の頭脳と謳われる方が、いったい何をあんなに悩んでるんでしょう?」

「そうね、私も永琳があそこまで悩んでるのを見るのは、長い付き合いだけれど二回目だわ。そもそも永琳って何でもすぐ答えに辿りついちゃうから悩まないし。だからある意味貴重よ、この光景」

「……姫様、面白がつてませんか?」

脳が焦げるほどの螺旋に苦しんでいる永琳を、扉の隙間から除く蓬萊人と兎。この二人が一緒にいるというだけでもうすでに珍しいことなのだが、さらに共に覗きをはたらし、しかもその対象が悩んでいる永琳ともなればこれはもう二度と訪れることのない奇跡だと言えよう。

暇を持て余していた輝夜が永琳の下に向かっていてるところだったために、面白半分で行ったというのがこの切っ掛けなのだが、輝夜が満面の笑みを浮かべているところを見ると、面白半分だったのが完全に面白になったようだ。

従者が悩んでいるところを覗き見てこんなに笑えるのは、もう性格が悪いという言葉以外で言い表しようがないのではないかと思うのだが、当然てるはそんなこと口に出さない。おくびにも出さない。どれだけ隠そうとしてもこの姫様には全て見透かされて

いるのではないかとも思うのだが、そんなことは考えてもわかるはずがないことなので不安にも思わない。

その肝の太きこそを輝夜は気に入っているのかもしれないし、肝が太いからこそ立場の違いをあまり気にすることなくこうして一緒に行動できているのかもしれないが。

良くも悪くも本音を漏らさないという点では二人はよく似ている。

「うーん……これじゃあ話しかけられませんか。薬について少し聞きたいことあったんですけど……」

「あら、話しかけちゃえばいいじゃない？」

「え？ いや……、あの状況のお師匠様に話しけるのはそこその勇氣が必要と言いますか……」

「……私としてはむしろ、今の永琳には誰かが話しかけた方がいいと思うわよ。今の永琳は言うなら、自分から袋小路に迷い込んだ鼠のようなもの。誰かが別の道を示してあげないと、そろそろ脳を酷使し過ぎて死ぬわよ、永琳」

まあ死んでも生き返るから、問題無いと言えば無いんだけどねえ、と気軽に輝夜は言う。

脳を酷使し過ぎて死ぬという言葉の意味がいまち飲み込めないのだが、過去にある状態の永琳を見たことがあると言っている輝夜が言っているのだから実際そうなる



可能性は高いのだろう。蓬莱人は死なない——とは言つても、脳を使い過ぎて死ぬなんて言う光景をこんな真ん前の特等席で見たいわけもない。

いつも目がどこに付いているのかと言いたくなるほど勘や気配に鋭い永琳が、気配も呼吸も殺しているとはいへ、自分に気付かないというのは確かに少々異常ではある。

なにに対してあんなに悩んでいるのかは微塵もわからないが、自分には見当もつかないほど途方もないことなんだろうという予想はつく。だからこそ、話しかけるのが躊躇われるというか。

これは輝夜が話しかけるのが正解なのでは。

そうは思うものの、完全に面白がってしまったっている自由奔放の姫が、助けるために話しかけるなんてことをするわけがないというのも重々理解している。そこまで長い付き合いというわけではないが、てみだつて伊達に長いこと生きていない。他人を見る目くらいは養ってきたつもりだ。

養ってきた結果が、自分が話しかけるしかないという最悪な結論をもたらすものだったならば、あまりにも悲しい収穫だと言わざるを得ないが。自分を追い詰めるために目を肥やしてきたわけではないのに。

「ちなみなんですけど、姫様はお師匠様がなにご悩んでるかかってわかったりします?」「あんなのでも月の頭脳だし、頭の中は私の数千倍はごちゃごちゃしてるだろうから、正

直言って見当もつかないわね」

「あんなのって……」

「……でも、前の時も、聞いてみれば案外簡単な話だった。それこそ、誰かと一緒に考えればすぐに答えが見つかるくらいに。協力と協調が苦手なのよ、簡単に言えばね。自分でそれを把握できてないし、中途半端に優秀っていう自覚があるから、誰かに相談するのを無意識に避けている」

「……………一人でもできるから、ですか？」

「それでもあるしそうでもないし。一人で何でもできるから、じゃなくて、一人以外で何もやったことがないからって言った方が適切かしら。そうね……、簡単に言うなら、魔理沙がいない霊夢みたいなものよ」

「あ……なるほど……」

そんな想像もしたくないようなことを言ってほしくはないが、一番納得しやすい例えだったのは確かだ。なんでもできてしまい、失敗したことがないという経緯あつての欠陥。

余計に話しかけたくない。永琳は相談相手を欲してはいるものの、人の心が読めるわけでもないのにそんなことはわからないのだから。

幻想郷の中でも永遠亭は特に癖の強い面々が集まっているというのは理解している

つもりだが、それらの個人を知れば知るほど癖がさらに強くなっていくのはどういふわけなのだろう。月から来た奴というのは皆してこうなのだろうか。

笑顔で親指を立てる輝夜から目線を逸らし、覚悟を決めて扉を開ける。ガラガラと結構な音量が響いたはずなのだが、永琳がてゐに気付いた様子はない。ただ両手で頭を抱え、重々しい雰囲気をつけている。今患者が来たらどう対応するつもりなんだろうかと思わなくもないが、永琳にとって仕事とプライベートは大した違いのあるものではないし大丈夫なのだろう。

なんと声をかけたものか。どうしたんですか。なにかあつたんですか。困ったことがあるなら言ってみてください。私に何かできることはありませんか。いや違う。そもそも自分は薬のことを聞くためにここに来たのだ。普通に質問をして、相談があると言われたら乗ればいい。

人に話しかけるのってこんなに悩むほど難しいことだったっけ。

「あの一、お師匠様？　ちよつと薬に関して聞きたいことがあるんですが……、今お時間大丈夫ですか？」

「……………てゐ？　……………てゐ、そうね、てゐ。ちよつどいいところに来たわね。うん。そうね。あなたが適任、あなたがぴつたりだわ。少し私の話を聞いてもらえるかしら？」

凄い。こちらからの質問を完全にスルーした。おそらくはてゐの言葉は耳に入つておらず、てゐの存在に気付いたから相談を持ち掛けたのだらうとは思うが、てゐがなぜ近くにいるかという考えにも及ばないほど悩んでいるということか。やべえ逃げてえ。追い詰められると耳がしわしわになるのは鈴仙の特徴だが、今だけは自分もそれを真似してもいいんじゃないだろうかと思う。あんなの意識してできるもんじゃないけど。

「……話ですか、分かりました聞きます。どうしたんですか？」

「ええ、そうね、そう。相談があるのよ。私一人じゃもうこれ以上の進展は望めないから、こうしてあなたに聞くわ。いいかしら？」

こんなにも選択の余地がない質問が世の中にはあるのか。

引き攣っているであろう顔の筋肉をどうにかして正常な状態に戻す。

「お師匠様からのお話ならいつだつてどこでだつて聞きますとも。まあでも、お師匠様に進展させられない答えに私がどうにかできるとも思えませんがねえ」

できる限りの平常心で、いつものような口調で永琳の問いに快諾する。今の発言で永琳が質問するのを止めてくれたりしないかなという実現する確率が無に等しい打算も混じっていたのだが、打算は打算。永琳は無理をして不敵な笑みを浮かべてゐに、疲れ切った顔で問う。

「最近——ウドンゲの様子がおかしくないかしら？」

「……………え？」

「いえ、別に確証があつて言つてゐるわけじゃないのよ。でも、近頃竹林で呆然と立つてゐるうどんげを見かけたし、兎たちからも心配する感じの報告が来てるし、感情を表に出すことが少なくなつた——いえ、表に出す感情が少なくなつた気がするのよ。てゐ、あなたなにか、心当たりないかしら？」

そりやあある。心当たりとか目の前でそういった鈴仙を見る機会が一番多いのは間違いなくてゐるだ。本人はきつとできる限り隠してゐるつもりなのだろうが隠しきれていない。

しかし、問題はそこじゃない。

永琳が、鈴仙を心配して、頭を悩ませる？

それは、蓬萊人が死ぬのと同じくらい、てゐにとつてあり得ない事だつた。別に永琳を無血無情の冷血人間だと思つていたわけではないが、輝夜曰く、脳を酷使して死ぬ寸前まで来ていたという永琳の悩みが鈴仙に対しての心配。

もしかしてこれは嘘の質問なのでは。本当の質問をするには自分は少し頼りなかつたから適当に偽の質問をでっちあげてこの場を流そうという算段なのではないだろうか。そう考えればしっくりくる。しっくりなんて来るか馬鹿。誰が見たつて悩むという行為の極致に達してゐた今のお師匠様に、そんなことをできるだけの余裕があつたと

思ふのか。だとすればとんだ役者だ。

飲み込みそうになる唾を止める。見開きそうな目で瞬きをする。不自然に上がりそうな口角を下げる。全身から吹き出しそうな汗を抑える。平常を保て。動揺を見せるな。今の永琳ならば、騙しきれる。

「——さあ？　鈴仙の様子がおかしいのなんていつものことじゃないですか。どうせまた、人里の人間たちのために何か作ろうとして、その考え事でもしてたんじゃないですか？」

「……それならいいのだけどね。あの子——月を見ていたから。気になったのよ」

「月くらい誰だって見ますよ。特に私たちは兎なんですから。たまにはあいつも、故郷を見上げたくなつたんじゃないですか？　もしくは、こないだ習つた月光の紫外線でも見ようとしてた、とか」

完全な嘘八百だ。口から出まかせを言わせたら自分の右に出るものはいないと自負しているてゐるだが、それで本当に騙しきれるかと言われたら半々と言つたところだろうか。あとは祈るしかない。黙り込んでしまった師匠が、冷静な判断をせず、自分の言葉に騙されてくれることを。

部屋の外から今の状況を笑いながら眺めているであろう性悪姫様への怒りに集中することで、緊張から出そうになる冷や汗をどうにか止める。正直こんなこと今まで生き

てきて一回もやったことがないからできるかどうかなんて全く見当もつかなかったが、  
案外やってみればできるものだ。極度の緊張は人を何段階か成長させるらしい。これ  
医療で何か役に立たないだろうか。立たないだろうか。

集中しろ。半笑いの苛つく顔を思い出せ。割と頻繁に見てるだろ。

ていうかなんでこんなに鈴仙のことで自分が苦勞しなくちやいけないんだろうと思  
う。このところ鈴仙の様子がおかしいのは事実なのだし、もういつそ全部丸投げしてや  
ろうか。永琳に鈴仙に直接聞けばいいじゃないですかって言ったらこの場は丸く収ま  
るのでは。

ただ、鈴仙の方に何が起こるかがわからない。

「あの子、最近何考えてるのかわからないのよね……。昔はもつと分かり易い子だっ  
ただけど、いつの間にあんなに混沌としちゃったのかしら……」

「……………」

月よりこの地上に降りてきた時から、鈴仙・優曇華院・イナバは非常に分かり易い兎  
だった。黙っていても、隠していても、偽っていても、一目見れば何を考えているかが  
すぐわかってしまうほどに。表情と感情が豊かだったのか、それとも貧しかったゆえに  
パターンで分類し表情を見分けられていたのかはいまいち判然としないが、いつからだ  
ろう。

なにを考えているかを質問しなくなったのは。

鈴仙には永琳が何を考えているかなど欠片もわからないが、永琳には鈴仙の考えていることがわかっていた。一方通行で独り善がりな以心伝心。それがどれだけ歪な関係か、気づいたときには遅かった。何も聞けなくなっていた。

結局、永琳は鈴仙の表面的な感情しか読み取れていなかったというだけのことなのだろう。顔に浮かぶ程度の些末な感情だけを読み取っていた結果、感情の上澄みだけしか見れなくなっていた。その下に、どれだけの感情が沈殿しているかを考えることもせず。

全てをパターンとして処理してきたが故の、当然の帰結。

「そんなに気になるなら、直接聞いてみたらいいじゃないですか?」

「え? ちょ、直接? ウドンゲに? 私が?」

「それ以外に何があるんですか……。別に偉そうなことを言うわけじゃありませんけど、誰かの気持ち、誰かが考えていることを知りたいなら、もう直接聞くしかないと思いますよ?」

永琳が具体的に鈴仙のなにが気になるのかは、てるにはよくわからなかったが、一つだけ分かったことがある。何故かはわからないし、何時からなんてことはもつと分らないが、この師匠、鈴仙に直接質問するのを物凄く怖がっている。



人が嫌がることを見抜くのが上手いてゐとしても、八意永琳がなにかを怖がっている——何かを嫌がっているのは初めて見る。死なない蓬莱人がなにかを怖がる必要がないというのも多分にしてあるだろうが。

別に鈴仙に問題を丸投げしようとしたわけではない。事実、鈴仙と永琳は会話自体は頻繁にしている。里に薬を売りに行くときも、何かを教わっている際も、分からないことを聞くにしても、会話自体は多い。だからきつと、永琳が怖がっているのは『質問』だけだ。

人の心を読めるわけではないには、それがどんな質問なのかまではわからないが、ここで質問を促せば、鈴仙は以前のように戻り、永琳から詳細不明の恐怖を取り除くことができるのではないかと思つたわけだ——が、当然そんな上手くいくわけがないこともしつかり理解はしていた。

前述した通り、その場合鈴仙がどんな反応をするかはわからないのだから。

あくまでもてゐるの目的は、薬に関する質問と、脳を酷使し過ぎて永琳が死ぬという事態を避けることだけだ。永琳が死ぬかもしれないのは、自分一人で答えが出せない状況に陥っているからであり、だとすれば、一人でも結論が出せるような悩みの落としどころを提示すればそれでひとまずは解決するはず。

それにも悩むという可能性は決して零ではないが。

質問するか、しないか。

さすがにそれ以上の面倒は見切れない。

「鈴仙のことですから別にそんな深刻な話じゃないでしょうし、むしろこのまま何も聞かずにもやもやし続ける方が問題だと思えますよわたしや。師匠が弟子の悩みやら相談を聞き出そうとしてなにか悪いってんですか」

てゐる自身も自覚はしているのだ。結局これは丸投げだと。永琳の死の危機も、鈴仙を理解できないのも、自分ではもう解決できないから、二人をぶつけることで解決してくれば一番楽だという逃げだと。

ただ、それと同時に思う。

逃げてなにか悪いのかと。

部屋の外でそこまでの会話を聞いていた輝夜は、蠱惑的な笑みを浮かべながらも、心底からの溜め息を吐いた。

## 3 不見

「毎度ありー」

全身を白の装束で包み、笠を深く被り顔を隠した薬売りが里の民家を一軒一軒回つていた。言うまでもなく、人里での薬売り、鈴仙・優曇華院・イナバである。妖怪であることが人里の人間にばれてしまえば、せつかくの効果ある薬も信用を失い、まあ売れなくなってしまうだろう。

まあ、公然の秘密というやつではあるが。

信用は実益よりも重いのだ。

信頼できないから切り捨てるのは人間のどう足掻いても覆せない悪い部分だと鈴仙は思っていて、成果を出せば過程なんかどうでもいいじゃないかとは思わないが、過程にこだわるあまりに成果を出せないというのはどう考えても本末転倒だろうとも思う。

見栄えばかり気にして中身が空っぽ。

そんなことになっているのは人間だけだ。

まあ、一部の人間はそういうのを気にしなすぎだったりすること——。

「よう、妖怪兔」

「いい加減その呼び方止めてくれない？ 狂わすわよ？」

「脅しが怖い」

近頃、里内での呼び止め方に一欠片の優しさも感じられない魔理沙はそういう人種なわけだ。実益さえはつきりしていれば見栄えも過程も気にしない、最終的な結果を一番に求める貪欲な人間。

そういう人間が一番話しやすいのは確かではあるのだが。

呼び止めるときにはそれに足るだけの理由がある。

例えば鼠除けだったり、あるいは都市伝説だったり。

毎回毎回まともな話題ではないのであまり呼び止められたくはないのだが、妖怪兎と呼ばれてしまえば応じざるを得ないのが、正体を隠さなければならぬ妖怪兼薬売りの悲しいところだ。

「で、今回は何の用よ。本当にそろそろ里で呼び止めるのやめてほしいんだけど。そっちは気軽な発言なのかもしれないけど、私としてはあんたに生命線握られてる気分なのよ、このところ」

「いや、悪い悪い。そう呼べば絶対止まってくれるからついな。私だって別にお前を困らせようと思ってるわけじゃないんだよ」

「そんなに信用できない言葉も久しぶりに聞いたわ……」

苦笑いを浮かべながら適当な謝罪を口にする魔理沙を、鈴仙は冷たい目で見ながら肩を落とす。どう考えても反省している様子ではないし、これからも言われるんだろうなとも思う。

しかし魔理沙としては、今回は珍しく本気で申し訳ないと思っていた。だって、今回魔理沙は、大した理由もなく、己の直感に従って鈴仙を呼び止めてしまったから。

呼び止めなければならぬと思った。

「いやほら、聞きたいことがあつたんだよ。少し前のことで」

「……少し前？ 都市伝説に関してのなんかとか？」

「そうそう、そんなぐらいのやつ。『世界轉覆奇談』の時の話だ。覚えてるだろ？」

「そりゃまあ……」

覚えているに決まっている。天狗の新聞から広まった世界滅亡の与太話。終末思想の流布。あれの対応には色々な所が色々なことをしたのだから。もちろん永遠亭も一枚噛んだわけだが、何か聞かれるようなことがあつただろうか。

「あの時お前が売つてた薬、買った人に袋を見せてもらつたら『抗鬱薬』って書かれてたんだよ」

「そうね、抗鬱薬だけど、それがどうかした？」

「鬱っていうのは精神の病気なんだろう？ なんか細かいこともごちやごちや言つてたけ

ど、見えない将来に向かっての不安——不安障害っていうのも併発するって聞いたぜ？」

「……魔理沙にしては詳しいわね。そうね、そこまで知ってるなら隠す意味もないから教えるけど、あの時売ってたのはその鬱を抑える薬。世界が終わるんじゃないかっていう不安で鬱になりかけてた人はたくさんいたからねえ。それなりに儲けさせてもらったわ。で、まさかその件に関して文句があるとか？」

「違うよ。文句なんかない。むしろ里が今みたいに落ち着いてるのはお前らのおかげっていうのもあるわけだから、感謝こそすれど、文句なんて言うわけないだろ」

「……どーだか」

魔理沙がどこから鬱に関しての情報を仕入れてきたのかは鈴仙にも大体の察しがあったが、別に今それを突っ込んで面白くことにはならないだろうことはわかっていた。魔理沙だって別に隠しているわけじゃないんだろうし、自分だってそんなに興味があるわけでもない。知られて害があることというわけでもないし、そんなに警戒することもないだろう。

鈴仙は手に持った団子の串を口に運びながら、魔理沙の方を向く。

「で、聞きたいことっていうのはそれ？」

「ああ、違う違う。こんなことじゃないんだ。こんなことじゃないんだが……」

魔理沙は悩む。果たして自分はこの質問を目の前の兎に向けていいものかと。基本的に直情径行が売りの魔理沙ではあるが、霊夢よりは論理的思考ができるという自信もある。だからこそ、ここまで彼女が葛藤するのは珍しいことだと言えた。

ただ——目の前の妖怪を放置しておいてはいけないという気持ちの方が圧倒的に強い。

少し前に、里の人間に薬を売っているところを見て、魔理沙は直感的に思ったのだ。今どんな形でもいいから声をかけなければ、もう二度と声をかけることができなくなる

と。

そこには科学的な何かも魔法的な何かもなかった。どこまでも純粋な勘。だがだからこそ、自分のその勘に従うべきだと思ったのだ。

「……………なあ、お前さ——最近元気か？」

「え？ 急に何よ。見ればわかるでしょ、元気よ」

そう言いながら鈴仙は団子を口に入れる。もうそろそろ頼んだ団子もなくなりそう

だ。

「いや、そうじゃなくて……、えつと……」

魔理沙から鈴仙に対する不安感は説明できる類のものではない。あえて言うとしたら、いつもと何か違うような気がした。それだけなのだ。それだけだけど、だからこそ

見過ごせない。

「……なんかさつき、薬売ってるお前を見たときさ——仕方なく売ってるって感じがしたんだけど、私の気のせいかな？」

「……………仕方なく？」

一瞬、鈴仙の言葉から感情と呼べるものの一切が抜け落ちた。

初めて会った時から、分かり易い奴だった。そもそも師匠やら姫様やらにただ従っているということが多い奴だ。その行動には圧倒的に自分の意思と呼べるものが欠如していて、言つては悪いがそれは薬の訪問販売も例外ではなかった。

ただ売るべくして売っている。

もちろんそこには、自分の師匠であるところの八意永琳への尊敬の感情が見えていて、薬を売るといふ行為に一種の誇りさえ感じているようでもあるように思った。以前は、だが。

今の鈴仙からそういった様子は全く感じられない。

それこそ、今本人に言つたように仕方なく売っているという感じだ。

「……………仕方なく」

そしてその情報は、鈴仙に決して少なくないショックを与えた。

こういう真面目な話の最中で魔理沙がふざけたことを言うことはほとんどないと鈴



仙は知っていた。短く無い付き合いだ、さすがに人となりくらいはわかる。魔理沙の言う通り、自分はきつときつまで他にすることも無いから仕方なく師匠が調合した薬を売り歩いていたのだろう。

自分がこれ以上ないくらいに信頼している、薬学の師匠であり生き方の師匠であり、命の恩人である八意永琳の薬を仕方なく売っていたのだろう。他にしたいことがあるわけでもないが何をすればいいのかなんて鈴仙にはもうわからないからこうして今しなくてはならないことをさながら情性のように行っていたのだろう。なるほどそりゃあ魔理沙に心配もされるわけだ。きつと今自分の顔には能面のような表情が張り付いているのだろう。感情の出し方なんてとつくの昔に忘れた。出す必要がなかった。だつて出さなくても周りが自分が今なにを考えているかを読み取ってくれたから。表に心中を見せる必要なんていつの間にかなくなっていた。地上の兔の友はこつちから関わりなくても関わつてきてくれる。師匠は自分が何も言わなくても求めていることを教えてくれる。そんな世界で一番と言つてもいいくらい恵まれている自分が師匠の薬を仕方なく売るなんていうことがあつてもいいのだろうか。そもそも自分はこのところ情性以外で動いたことがあつただろうか。動く肉塊であるところの自分は師匠に命を救われた瞬間から何を差し置いても兎として動かなくてはならない。なのになんて自分は今ここで止まっているのだろう。

なにをしている？

なにをすればいい？

「……………い、……………おい？」

そもそも月から逃げ出した時点で自分という兎の皮をかぶった肉塊に存在価値など存在しない。それにもかかわらず師匠も友も自分と話してくれる。助けてくれる。教えてくれる。読み取ってくれる。どうしようもない存在であるはずの自分にそこまでされる価値があるのか。

それは今、横にいる霧雨魔理沙にしたってそうだ。忘れていたじゃ済まされない。自分は何も言わなくても感情が周りに伝わってしまう傍迷惑な存在なのだ。ただでさえ普段から周囲に気を配っている魔理沙に見抜かれるのなんて考えなくてもわかるだろう。

「……………鈴仙？」

ぞつとした。

まだ団子のついた串は地面に落ち、先ほどまでこちらに向いていたはずの双眸はどこでもないどこかを見つめている。ポーカーフェイスを常に浮かべているのかと思うほど、普段何を考えているかわからない鈴仙の表情は完全な無だった。

分かり易い奴ではあるが、何を考えているかわからない奴でもあった。

何かを考えるほど、自分の意志と呼べるものがあるのかどうかも判然としなかった。何を考えているのかの表層は読み取れても、その内側に何があるのかなんて分かりたくもなかった。

因幡てゐからすれば、何も無い、が正解なのだが。

だからこそ、分かりたくもなかったという魔理沙は正しい。人として正しい判断をした。

見栄えばかり気にして中身が空っぽ。

そんなことになっているのは、彼女だけだ。

「ごめん、魔理沙」

「は？ なにが……」

突然俯いたかと思うと、鈴仙は謝罪を口にした。それが何に對する謝罪なのかなんて魔理沙には分かるはずもなかった。自分の気持ちを誰かに伝える方法なんて、鈴仙はとつくの昔に忘れていた。知りたければ読み取るしかない。穴だらけの上っ面を覆うだけの意味のない感情を。

薬の入った箱を背負いなおすと鈴仙は立ち上がる。そんな鈴仙を魔理沙は呼び止めようとするが、声が出ない。中途半端に持ち上げられた手は空気をかき混ぜ、何も掴むことなく静止した。

自分は何か取り返しをつかないことをやらかしたのではないか。

そう思うものの、思考が行動に結びつかない。直情径行が売りの魔理沙様だろ。今ここで、服の裾でも箱の角でもなんでもいいから掴んで止めてもう一度話すべきじゃないのか。

魔理沙は鈴仙の事なんてほとんど知らない。本人から聞く機会もなかったし、聞くべきではないという思いもあつたし、そもそもそんなに興味もなかった。だって、今が楽しそうだったから。

今を楽しんでいる奴の昔なんて別に構わない。ひっくり返す必要も穿り返す必要もない。大事なのは過去でも未来でもない。今だ。刹那主義と言われようが享樂的と言われようが、今以上に大事なものなんてあるわけがない。

なんでそんな暗い顔をしてる。

今が楽しいだろ。

鼠除けの説明をしているときあんなに楽しそうだっただろ。

なんで謝るんだ。

何も悪いことなんて、してないだろ。

言いたいことが激流のように頭の中を巡る。だが、自分に背を向け立ち去ってしまったその背中、自分を拒絶しているようでもあり、自分自身を拒絶しているようでも

あった。

鈴仙・優曇華院・イナバは、誰かの感情を読み取ることも、とうの昔に忘れてしまった。

みんな、感情を出すのが上手すぎるから。

隠す努力も表す努力も読み取る努力も、いつからしていないだろうか。それすらも忘れた。

永遠亭中庭。

普段ならばこの時間は自室に籠っているはずの八意永琳は、中庭をウロウロしていた。

あつちに行ったりこつちに行ったり、竹林を覗きに行つたかと思えば空を見上げていたり。冬である現在、日が暮れるのは早い。もう少し経てば、日は沈み、月が光るだろう。

別に暗くなること自体には何の不都合もないのだが、数日前にてゐから助言を受けた身としては、いつまでもその行為に尻込みしている場合ではないという焦燥感があつ

た。

鈴仙にいつも通り薬の調合を教えたり、里で買ってきて欲しいものを伝えたり、今までと同じような会話ならばこの数日だつてしてはいたが、あと数歩が踏み込めない。

俯いて顔を抑える。

自分はこんなに臆病だつただろうか。たかが弟子に、最近何か困つたことはあるかとか、聞きたいことはないかとか、元気がないようだがどうかしたのかと聞くだけだろう。悩みの内容に関して言うならば、それはてゐと大差ない。

しかし、口の重さはてゐ以上だ。

人の感情を察するということにも永琳は長けていて、だからこそ今まで誰かにそういった類の質問をすることもなかった。月に数人、感情が読めない不思議な者もいたことはいだが、今現在の鈴仙ほどではなかった。

今まで分かつていたはずのことが、ある日急に分からなくなる。

初めての経験というものを永琳は基本的に好いているが、二度目の経験というと、永琳にとっては退屈なものになる。一回目で全てを理解してしまい、継続する理由がなくなる。ある意味、天才の苦悩と言えるのかもしれないが、周りから見れば贅沢な話でもある。

だからこそ。

理解していたはずの弟子を、改めて理解しなくてはならない状況に、永琳は恐怖を覚えていたわけだ。

「……遅いわね」

いつもだったらもう里での訪問販売を終えて、永遠亭に帰還しているはずなのだが、今日は少し遅い。少しとは言っても、もういつもの時間から一時間は経過しているが。

蓬萊人の時間感覚を理解しようとする方が間違っているのかもしれない。

顎に手を当て、月を見上げていると、背後で着地する音が聞こえた。ああ、ようやく帰ってきた。もう空は半分黒く染まっているが、まだそんなに遅い時間というわけでもない。てゐに急かされたり輝夜にからかわれる前に、自分の心の平穩のためにもさっさと聞いてしまおう。

そう思つて振り返つた。

目に入つてきたのは、鴉天狗の新聞記者、射命丸文。

そして——天狗に抱きかかえられた、弟子だった。

「……………え？」

「どうもこんばんは永琳さん。清く正しい射命丸です——と言う前に、こちら、お弟子さんです」

状況が呑み込めない。目の前で弟子を抱えている新聞記者は、その背中に薬箱を背

負っていた。おそらく鈴仙が背負ったままでは抱えることができないからだろうが、どうしてこんな状態になっているのかは全く分からなかった。

これは月の頭脳とかは関係ない、予想外の事象に対する混乱である。

文も困った顔をしているし、服装が汚れているとかいうこともないので、おそらくは戦いの末にこうなったとかではないと思うのだが、そうなるなら鈴仙があんな静かに寝てしまっている——気を失っていることに説明がつかない。一応は医者だ。睡眠と気絶の違いくらい見ればわかる。

いや、普通は見ただけではわからない。

だが、永琳には分かる。

「……えつと、どうして貴女がウドングを抱えているのかしら?」

「あー、えつとですわね……」

眉をひそめ、困った顔をさらに困らせ、文は永琳の方へと歩み寄る。

その動作に不審な所は見取れないので、不意打ちをしかけようとしているわけではないだろうと判断する。鈴仙を受け取るために永琳の方も文の方へと少し近づく。

「実は鈴仙さん、飛んでる最中に急に気を失ったらしくてですね、放置しておくわけにもいかなないので、不肖、幻想郷最速のこの私がこうしてお届けに参ったというわけです」

「……気を失ったらしいってことは、それを見つけたのは貴女ではないの?」



いくつか疑問点はあったが、一番に聞いておかないと後々はぐらかされそうなどから先に聞くことにした。永遠亭も何度か文々。新聞で記事になったから知っていることではあるが、この天狗、重要なことも特に重要じゃないことも曖昧にぼかすのだ。情報の重要度を悟られないようにするための小細工なのだろうが、細かいところまで教えてほしい今はどうにかしてそれを取り払う必要がある。

「そうですね。鈴仙さんが落下したところにも私は居合わせたんですが、一番最初に目撃した方は用事があるとか言つてどこかにいつちやいましてねえ。こうして私が鈴仙さんを運んできたというわけです」

「……そう。ありがとうね」

「いえいえ、お礼はあっちの方に払ってもらうので構いませんよ」

目撃した方、あっちの方。

名前を伏せるということは、第一発見者が誰なのかを自分に知られたくないということとだろうかと永琳は思う。あるいは、鈴仙に知られたくないということなのか。

伏せているのはどっちなのか。

鈴仙を手渡せる位置まで二人が近づくと、文は静かに口を開く。

「……軽いですね」

「軽い?」

その言葉の直後、文は永琳の腕に鈴仙を乗せ――。

「……………」

「軽いでしょう？ 医者の子とは思えないほど、体調管理ができていない軽さです。身長が低いわけでもないですし、私のような素人からでもわかります。この軽さは、不健康すぎる」

それなりの重さが来ると予想して構えていた腕は、その反動でむしろ上がりそうになった。抱えた瞬間、永琳は絶句した。

世界には奇妙なことなんていくらでも起こる。日本の山奥には妖怪の最後の楽園があるし、その楽園には妖怪を軽々と打倒する巫女がいるし、古典的な衣装を身に纏った魔法使いがいる。月から移住してきた不老不死も兎もいる。

だが、これは。

四十キロ、あるのか？

「里で魔理沙さんとお団子を食べているのを目撃したことがありますから、別に拒食症とかではないでしょうし、医者の子ですから栄養失調というわけでもないでしょう。だとすると考えられる理由は……なんでしょうね？」

薄々感づいているのだろう。答えを永琳に促すような厭らしい聞き方をしてくる。

挑発の一步手前と言ってもいいくらいだ。新聞記者なりの話術なのだろうが、時と場合

と相手によつては割と本気で命の危険がある行為でもある。

だが、その質問は今の永琳には刺さる言葉だった。

異常に気付いておきながらそれを放置した結果が現状だ。今も尚、師匠の腕の中で眠っているこの弟子が何に悩まされているのか、何に苦しんでいるのかは分からない。

いつからだ。

誰かから後押しされなくては、崖つぶちに立たなくては、行動を起こすことができないほどに弱くなつたのは。月の頭脳が、聞いて呆れる。

触れば分かる、見れば分かる、本当ならもつと早く気付くことができただけはずの弟子の異常。

軽すぎる体重、浅すぎる呼吸、少なすぎる脈拍、低すぎる体温、衰えている筋肉、荒れている肌、浮かんでいる隈、色のない唇、全身の微かな震え、満足に動いていない臓器。

自分は一体どれほどの弟子を放置していた？

「実は近頃、鈴仙さんの様子がおかしいという情報が結構寄せられていまして。少し前まで元気だったはずの鈴仙さんが、最近は笑顔がどこか辛そうだとか、薬箱を重そうにしていたとか、目が虚ろな様子だったとか、ネガティブ方向の情報ばかりですね」

追い打ちのように突き刺さる天狗からの言葉。実際それは追い打ちなのだろうと思

う。ここまで弟子を蔑ろに扱ってきた情けない師匠に対する追い打ち。反論の術がない。きつと、反論する権利もない。

なぜ自分以外に分かるような不審な挙動に自分は気付かなかつたのだろうと思う。

考えるまでもない。彼女は、それを隠していたのだ。今はもう読み取れなくなつた表情の裏に、自分の本心をひた隠しにしていた。

知っていたはずだ。誰よりも分かり易かつた彼女は、誰よりも隠すのだつて上手かつたのだと。誰よりも、自らの意志で表に出すのが苦手だと、知っていた。

見れば分かる。

見なければ分からない。

話せばわかる。

話さなければ分からない。

自分から見せることはない。

自分から話すことはない。

感情を出すのが、下手だから。

「……………届けてくれて、ありがとう」

「……………いえ、お気になさらず」

そう言うとうちは永琳に背を向ける。しかしそこで止まってしまった。

鈴仙の顔を覗き込んでいた永琳が、顔を上げて文の方を見る。

「……永遠亭の事って結構記事になるんですよ。優秀な医者ですし、薬も売ってますし。最近の兎ブームもそうじゃないですか。人里の流れの把握にも、鈴仙さんの存在はとてもありがたいんですよ。ですからまあ……なんとというか……」

「……………」

「——心配はしてるんですよ、これでも」

完全に暗くなった空を見上げながら、文はそう言った。

静かに浮かび上がると、ゆつたりとした様子で烏天狗は去っていく。あの天狗らしからぬ発言に永琳は一瞬だけ呆けたが、少しだけ、小さい笑みを口元に浮かべると、鈴仙の部屋へと向かう。

「心配してくれる子が、沢山いそうね、あの話からすると」

そう呟く。鈴仙の耳には届いていないだろうが、それでもよかった。ただ、自分の口に出して、自分自身に認識させたかっただけだ。嬉しい事実として。

歩きながら、空を見上げる。

月。

満月。

聞くべきだろう。

月を見て、彼女が一体何を考えていたのかを。

しかしまあ、それはいったん置いておいて。

とりあえず、永琳の目下の悩みは。

白装束のままの弟子を、どうやって着替えさせるかだった。

## 4 温度

走れ。

走れ。

走れ。

とつくの昔に身体はどこかは悲鳴を上げている。

肺が限界だ。

これ以上止まらなかつたら潰れるかもしれない。

何が自分を潰すのだろう。

自重か。

責任か。

追え。

追え。

追え。

どんどん先に進んでしまう人を。

四肢が千切れようとも。

置いていかないで。

頑張りますから。

私も連れていって。

これが依存に近いなにかだということにはわかっている。

一方通行でしかない歪。

自分の何歩先まで手を伸ばしても届かない背中。

息を切らせて走って。

疲れても止まらないで。

進め。

進め。

進め。

触れられないとわかっていても。

追いかけることには意味があるはずだ。

ああ。

なんで。

気持ちが悪い。

届きはしないのに。



とつくの昔にそんなこと知っているのに。

永琳が顔を上げると、目の前には誰もいなかった。確かに今、誰かが目の前にいる気がしたのだが。感傷的になってきているのだろうか。自分らしくもない。最初から分かっていたはずのことが実際に現実になったからって、それが一体何だというのだろうか。死なない自分は、誰からも置いて行かれるなんて、そうなった瞬間から理解していただろう。

「結局私じゃ、あなたを理解してあげられなかったのかしらね」

寂しげにそう呟く。今から思えば、自分は彼女に少しでも足並みを合わせたことがあつただろうか。自分の後方で息を切らせている彼女を、その場に留まって待っていたことがあつただろうか。振り返って、優しく手を差し伸べたことがあつただろうか。自分の背中しか見たことのないあの子の気持ち、少しでも想像したことがあつただろうか。

「何かを教えることは向いていても、誰かを導くのは向いていなかったのね」

彼女には、自分の持つ知識の全てを使つて接した。幻想郷の中では誰も知らないであろう進歩した技術を、余すことなく知りたいだけ教えた。あるいは、それは独り善がりだったのかもしれない。自分しか知らないことを誰かにも知つておいてほしいという、独占欲やエゴイズムにも似た何か。教えれば、そこに何かが生まれるんじゃないかと勝手に考えて、自分勝手に生きて、自分の勝手では死ねず、こうして別れることになった。

「思い、出せないわね」

自分より遙か彼方を見るあの子の顔を、疲れ切つてしまったあの子の顔を、目の前者に何かを期待するあの子の顔を、自分の背中を見つめるあの子の顔を。自分は一つだつて知らない。それでいいと思つた。彼女はいつだつて振り返れば見える位置にいた。自分がどれだけ先を歩んでも、しっかりと追いかけてくれた。懸命に頭と体を動かす彼女の声が聞こえていた。それだけで自分は安心できた。彼女から自分は、どのように見えていたのだろう。豆粒のように小さく見えていたのか、それとも、どこにい

でも見えるほど大きく見えていたのか。自分に見えているものが、他の者にも見えているとは限らないのに。

「何を、見ていたのかしら」

彼女と共にいた長い時間、自分は一体どこを見ていたのだろうか。視野が広すぎてなんでも見えて、だからこそ本当に見なければならぬものを見過ごした。思い出すのは、作られた表情ばかり。昔のように、隠そうとしているのに上手くいかず、考えていることが露呈してしまうことに頬を膨らませていた彼女の記憶は、もはや遠い昔の話だ。時間が、過ぎていく。彼女を過去へと置き去りにして。

「手を握って、引いてあげていれば」

どうにかなったのだろうか。笑顔で自分を見つめる彼女を、笑顔で見返すことはできなかったのだろうか。笑いあっている自分たちというのが、どこかにいたのだろうか。そんな想像も、過去へと流れていく。あつたかもしれない未来は、無かった現在なのだ。今ここでこうして立ち尽くしている自分が、そんな理想の過去を経験できたわけもない。もう

遅い。なにもかもが。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

謝ったつてなにもならないのはわかっている。時間は戻らないし、後悔を払拭することもできない。目の前の現実には引つ繰り返すことはない。ならば、それは誰への懺悔か。

目の前に鎮座する弟子の墓石を見つめながら、八意永琳は、ただ悔いた。嗚呼、こんな時でも泣けない自分が、本当に嫌いだ。

「……………てい」

「あいたつ……………あら？」

「おはようございますお師匠様。魔されていたので起こしちゃいました。すみません」「いえ……………、起こしてくれて助かったわ。あまり愉快でない夢を見ていたから」

夢か。あのどうしようもない無力感も、埋めようのない喪失感も、拭いようのない虚

無感も、全部夢か。助かったと言えば助かったのだろうが、寝起きでこんなに不愉快な気分になったのはいつぶりだろうか。起こしてくれたてゐに何か八つ当たりをしそうな勢いで不愉快だ。

枕元に座るてゐが、不安そうな顔を浮かべる。

「……すつごい不機嫌そうな顔してますけど、もしかして起こさない方がよかったですか？」

「違うわ。物凄く嫌な夢を見てただけだから気にしないで。貴女が起こしてくれなかつたらきつともつと不機嫌な顔になってたと思うし」

「……お師匠様つて夢見るんですね」

「たまに見るつて感じかしらね。勿論、自分の意志で見ることではできないのだけれど……」

「普通出来ないですよ」

鈴仙は永琳が寝る必要がないと思つていようだが、決してそんなことはない。考えすぎで脳がパンクしそうになることがあるように、いくら不老不死の蓬莱人と言えど、睡眠は生物である以上必要だ。ある程度寝ないで活動することができないのかと言われたらできると言えるけれど、作業効率は間違いなく落ちる。

当然、夢だつて見る。

良い夢も——悪い夢も。

まあ、永琳は鈴仙にそこまで詳しい説明をしたことがないので、弟子がそういう風に思い込んでいても仕方のないことではあるが、蓬萊人はそこまで万能ではない。

夢というのは起きている間の記憶を寝てる間に整理する際に、その内の一部の記憶が視覚野で再生されているものだ。それと同時に、夢にはその者の深層心理が反映される。あのような夢を見たということは、いつか、ああいうことになるかもしれない、昨日の自分はどこかで思ったのではないだろうか。腕の中で眠る彼女を見て、自分はなにを思ったのだったか。

「で、こんな朝からどうしたの？ 何か聞きたいことでもあるのかしら？」

「いえ、その……この間、聞きたいことがあるなら鈴仙に直接聞いた方がいいんじゃないかって言ったじゃないですか」

「そうね。そう言ってくれたわ」

「それなんですけど……やめておいた方が、いいんじゃないかなって……」

「え？」

いつもの飄々とした態度も、掴みどころのない話し方もどこへ行ってしまったのか、てゐは気まずそうな表情を浮かべ、視線を逸らし、人差し指同士を合わせながら、弱々しい口調で言った。数日前のてゐからの提案によって、永琳としては結構救われた部分

もあつただけに、その発言の意味はよく理解できなかつた。

弱々しい口調のまま、てゐは語つた。少し前から鈴仙の様子がおかしいと気付いていたこと、それを理解していながら永琳にその解決を丸投げしたこと、後々になつて最悪の場合を想定してしまつて急いで止めに来たこと。

いつもよりも耳が垂れてしまつてゐる。考えを掴ませないてゐがここまで落ち込んでいるのは、永琳でも初めて見る光景だつた。

俯いてしまつてゐるてゐの頭頂部を見て、永琳は思う。

あの子が俯いてゐるのを最後に見たのはいつだつただろうか。

あれは、確か――。

「――ありがとう、てゐ」

てゐの体がびくりと跳ねた。それは予期せぬお礼の言葉に対する驚きであり、頭を撫でられているという状況に対する呆けだつた。失敗を誤魔化そうとしに来たという、言つてしまえば、自首をして少しでも罪を軽くしようという打算にも似た考えがてゐの中にはあつた。

だからこそ、なぜ自分が今、頭を撫でられているのかが見当もつかない。

「……あの、お師匠様？」

「貴女の言葉のお陰で、私の気分は軽くなつた。それは紛れもない事実よ。しかも、やつ

てしまったと思ったことを自分で報告しに来てくれた。……怒ると思っていたかしら？」

「ええと……まあ」

「怒らないわよ。あの時の私に、なにを言ったらいいか分からない末のあの言葉だったんでしょ？ 感謝をしても、説教をする理由はないわ」

冷静な今から考えてみれば、あの時の自分は完全にどうにかしていた。てゐがなぜ目の前にいるのかも考えず、拒否などしようもない質問をして、自分の都合で自分の言葉をただ並べていた。

てゐが追い詰められてたというのも、冷静な状態だったなら、一目見れば分かったはずだ。

師匠なのだから。

そう、自分は、師匠なのだ。

「それに、貴方のお陰で今、分かったわ」

「……なにがですか？」

「私とあの子の間になにが足りなかったか、よ」

永琳は布団から起き上がると寝巻から普段着に着替える。気合を入れるように帽子を被り、きよとんとしていているてゐをちらりと見ると、少し笑って、襖を開けて廊下へと



出た。

このぐらいの時間だったら彼女は台所にいるはずだ。この寒い中、一番に起きて自分たちの朝食を作ってくれている。

ほら、聞いていて落ち着く、規則的な包丁の音。

物音の少ない永遠亭に、その音はよく響く。

朝まで起きていたときに聞こえるこの音が、どれだけ自分を微笑ませてくれたか。

足音を立てずに扉の前に立つ。この時間にこの扉を開けるのだって、果たしていつぶりだろうか。思い出そうとすれば思い出せるかもしれないが、思い出す必要もないだろう。

これからは、きつと頻繁に開けることになる。

静かに扉を開けると、そこには上下左右に小さく揺れる背中。集中しているのか、扉を開けたのに永琳には気付いていないようだ。

小さい、背中。

だと思っていたのに。

いつの間に、こんなに大きくなったのだろうか。

永琳は、背後からそつと、鈴仙を抱きしめた。

味噌汁をかき回していた右手が止まり、全身が驚きで震える。

「おはよう、ウドンゲ」

「……師匠？ えつと……おはようございます。朝ごはんはまだですよ？」

「わかってるわ。わかってる。わかってるのよ」

「……どうしたんですか？」

「いえ、なんでもないので。なんでもないので。温かいわね。貴女は温かい」

「まあ、兎は体温が高いので……」

優しく抱擁されている鈴仙は、未だ状況が掴めない。こんなに距離が近いことが最近あったらどうか。ましてや、抱きしめられるなんて。嬉しいとかではなく、もうそろそろ死ぬから今くらい優しくしてあげようみたいな状況なのかという怯えの方が大きい。

ただ、温かい。

狭い世界でひとりぼっちだった鈴仙の背中は今、温かい。

鈴仙の髪に顔をうずめている永琳の顔は振り向いたって見ることはできないけれど、振り向く気はなかった。心地いい。鍋を見つめながら、鈴仙はそう思う。

寒い。寒い。寒い。

それだけだった台所に、自分以外の誰かがいるだけで、こんなにも温かいものだろうか。

わからない。

鈴仙には、わからない。

向かい合ってこなかった弟子と師匠の歩み寄りとは、きっと、ここから始まる。  
二人でいれば、こんなに安心できるのだから。

# 離別、そして忘れ 『茨木華扇』

## 1 追想

人間の里。

幻想郷内部にて、特別な力を持たない一般的な人間が住居を構える場所。そこまで山の人間が住んでいるわけではないが、かと言って人が少ないかと言えばそんなことはないという、言ってしまうえば、普通の人間の領域だ。

その人間の里には割と妖怪が出入りすることもある。妖怪に限らずとも、巫女であったり、魔法使いであったり、メイドであったり——人間に害を及ぼすことのない存在がよく里には出入りする。

あるいは——仙人であったり。

少女と呼ぶべきか、あるいは女性と呼ぶべきかはいまち判然としないが、女が饅頭を食べながら里を歩いてきた。その饅頭はつい先ほど店先に並んでいた出来たてのもので、まだ中は熱く、湯気を吐きながら食べていたが、なかなか美味しい。

また行っても良いかもしれない。

そう思う彼女の名は、茨木華扇。

仙人としての名は茨華仙。

彼女もまた、人ならざるモノでありながら人里に出入りする者の一人。

饅頭を一つ食べ終わると、華扇はゆっくりとした動作で後ろを振り向く。

そこにはなにもない。ただ、いつも通りの人里の喧騒があるだけだ。

ここ最近、人里にいと必ず誰かの視線を感じる。でも振り返っても誰が自分を見ていたのかはわからない。仙人は人間よりは自然に近いところにいる。だから、そういう気配には敏感だ。気づけないということは、勘違いなのだろうか。

だが、何回も感じているのだから勘違いということはないだろう。しかし、茨木華扇は饅頭を食べながら緩んだ顔をしていても警戒を怠ることはない。立場上、余り大つぴらに行動しすぎることでもできないのだから、周囲に気を配るのは当然とも言えた。

そして再び歩き出す。

ここで視線に気付いていたら——というのは、少しばかり野暮かもしれない。

「はあ。最近はこれといった事件も起きてないわね。霊夢も毎日暇そうにしてるし……、まあ、平和に越したことはないけれど」

華扇は神社への道を歩いていった。道とは言っても舗装されているわけではなく、何回も人が歩いたからその部分だけ草がない程度の道でしかないのだが。参拝客の少ない神社にはぴつたりではあるか。

そんなことを霊夢に言ったら鬼の形相で追いかけれそうだなと想像して、一人で軽く吹き出す華扇。

なんとなく罪悪感が芽生えたが、霊夢ならきつとお土産を持って行けばすべてを許してくれそうだなと思うと、若干ながら霊夢が不憫でならない。

特に今日は博麗神社に用事があるわけではない。華扇にとっては用事があるかどうかはあまり関係のない話なのだ。下心が全く無いわけではないのがまた微妙なところなのだが。

それはそうとして。

いまだに視線を感じるのとは一体何の冗談なのだろうか。人間の里に入って少し経ってから今までずっとだ。時間にして一時間は軽く超えている。人里に入ってから感じ始めたので、多分人間の視線だろうとは思っただが。

自分をつけてくる意味が全く分からない。

何か恨みを買うようなことをした覚えはないのだけれど。

とりあえず気付いていない振りをし続けてはいるものの、さつき一回振り向いたとき

にもう止めておこうとはならなかったのだろうか。華扇としては、威嚇というか、牽制  
というかのつもりで振り返った節もあったのだけれど。

博麗神社までついてこられるのは色々と問題が生じるし、もし魔理沙がいた場合、華  
扇の考えなどお構いなしに視線の主を捕まえるような気もする。いい加減この辺りで  
警告しておくか。

華扇が前触れなく後ろを振り返ると、近くの茂みからガサガサと音がした。  
露骨。

「あの、先ほどからずっと後ろにいるのはわかっていますよ？ 隠れていないで出てき  
てください」

無音である。草が揺れる音もしなくなった。存在がバレているのになお隠れ続け  
るその胆力は尊敬に値するが、やっている行為はとも褒められたものではない。仙人  
としては、少し説教でもした方がいいのかもしれない。

「……別に怒ったりしないので出てくる気はありませんか？ さすがにこう長い間つい  
てこられると放置するわけにもいきませんし、要件があるなら聞きますよ？」

無音である。呼吸の音すら聞こえない。存在がバレているのになお隠れ続けるそ  
の胆力はもはや尊敬に値しないし、やっている行為は咎められるべき行為であろう。仙  
人として説教すべきだろう。

「……人のことをずつと追いかけておいて、バレたら黙るとするのは少し卑怯ではありませんか？ いい加減に出てきなさい。自分から出る勇気がないというのであれば、私の方からそちらへ行きましょうか？」

先ほど音が聞こえた茂みと同方向から再び音が聞こえた。華扇は決して心が狭くはない。大概のことでは怒らないという自覚もある。度を越えればそりやあ一般的な反応として怒ったりはするが、今回はさすがに本人の限界だった。

今回が初めてではないのだ。常習犯なのだ。ここらでいい加減に釘を刺しておいた方がいいだろう。

華扇は待つ。無言に耐えかねて相手が出てくるのを期待して。

一つ、華扇が溜め息を吐くと同時に、茂みが揺れ、男が立ち上がった。華扇には見えない男だった。そもそも人里の人間とはあまり深い交流はしていないのだ。距離を置いているというわけではないが、わざわざ深く関わる必要もない。だからなおさら不思議だった。

一体、何の要件だというのか——男が口を開いて、そして言った。

「あ、あの！ 仙人様ですよね!? 身の程を弁えていない発言だというのは自覚したうえで言います！ す、す、好きです！ 俺と——付き合っただけませんか!？」

華扇は固まった。



茨木華扇は固まった。

男を見ながら、何も言えず、ただ硬直した。

仙人になる前も、仙人になった後でも、告白されたのは、これが初めてだった。

## 2 懊惱

「いいんじゃないの？ なに、なんか駄目な理由でもあるの？」

「もう少し真剣に考えてくれませんか？ こっちはかなり切羽詰まってるんですから……」

博麗神社。

別名、妖怪神社。

幻想郷の核とも言える神社ではあるが、見るまでもなく、参拝客はいない。

今日も今日とて、博麗の巫女——素敵な楽園の巫女、博麗霊夢は、誰も通らない神社の境内を掃除する。

告白された華扇は、博麗神社内の掃除をしていた霊夢に相談を持ち掛けていた。本来ならば自分が一人で考えることなのかもしれないが、という思いはあつたものの、なにせ初体験の出来事である。自分一人で考えても煮詰まるであろうことは想像に難くない、だからこそ気は進まなかったものの霊夢に相談することにしたわけだ。

だがまあ、霊夢が真剣に考えてくれるかどうかというのは割と五分五分の賭けだった。性格的な問題もあるが、意外と霊夢は初心だったりするのだ。そういうところを目

撃ただけで赤面してしまうくらいには。

だから、まあ、言い方は悪いがあまり期待はしていなかった。

「つて言ってもねえ……、そいつ本当に本気だったの？　なんか悪戯だったりつてことは？」

「……自分を追い詰めるような発言にはなりませんけど、あの目は嘘を吐いている目ではなかった。それだけは、確かに、しっかりと分かってしまった。だからこそ、困っているんです」

もし仮に、あの男が言っていることが嘘だったならば、適当にあしらってその場を立ち去ることだってできた。だがそうではなかった。男はただまっすぐに華扇を見つめていて、瞳の色を見るまでもなく、声の震えを感じるまでもなく、今の発言は本気だと覚ることができた。

ある意味、返事を先送りにして博麗神社へ避難してきた華扇は、男から逃げたと言ってしまうのかもしれない。色恋沙汰に免疫のない少女が、逢引を目撃しただけで赤面して目を逸らしてしまうかのように。

現実から目を逸らしたのかもしれない。

「困ってる、ねえ。まあ、確かに困ってはいるんでしょうけどね」

「……なによ、なんだか冷たいわね。なにか気に障ることもしましたか？」

「気に障るっていうことはないわ。ただ、あんたにしては少し、考えが浅いなと思っただけよ」

「考えが浅い？」

霊夢のその発言に、華扇は憤りなどをおぼえることもなくただ困惑した。考えが浅いも何も、そこまで深く思考できるような何かがこのやり取りのどこかにあっただろうか。

基本的に霊夢は神社にいるときは脱力している。体面を取り繕わないというか、体裁を気にしないというかなのだが、ゆえに、霊夢がこのようにきつちりと意見を言うてくることは非常に珍しいことでもあった。

「……えつと、浅いというのは、具体的には？」

「あんたは今——」

そこで一旦、霊夢は言葉を止めた。思っていることを言うことは確定しているが、どのような表現で伝えるのかに若干迷ったのだ。あまり直接的に伝えるべきではないし、かと言って遠回しすぎるとこの鈍感仙人は気付かないかもしれない。

霊夢は箒で落ち葉を掃きながら、何でもない事のように言った。

「——断るのを前提にして考えてるかしら？」

「そりゃあ、もちろん？」

華扇は疑問文のようになってしまった言葉を訂正することもせず、最後まで言い切る。疑問文になってしまったのは自信がないからとかではなく、それ以外に答えが見つからなかったからだ。霊夢がそんなことを聞いてくる意図も理解できない。

「……まあ、そうよね。あんたはそうよね」

「……さつきからなんだか引つかかる言い方をしてくるわね。言いたいことがあるなら正直に言ったらどう？」

どうにも煮え切らないことばかり言う霊夢を、まるで論すように華扇は言う。どちらかと言えば、今論されている立場は華扇の方なのだが、本人にその自覚がなければ馬の耳に念仏もいところだ。何を話しても右から左に流されては、話す甲斐もない。

霊夢としては他人の恋愛事情やら恋愛観にとやかくと首を突っ込むつもりもないが、少しだけ、華扇の言動に引つかかる部分があつて、だから口を挟まざるを得なかったのだ。

魔理沙がいなくて良かったと思う。

「二つだけ聞かせてもらおうわ」

「なにかしら？」

「——なんで告白を断ろうと思ったの？ 特に考えることもなく、膠もなく、一拍置くこともなく、断ることを前提にうちに来たの？」

「え？ それは、だって——」

そういうしながら華扇は、必死にその理由を探す。

なんでと言われてもそれが自然なはずだ。告白されたからといってそうですかわかりましたありがとうございますございませうこれからよろしく願いますだなんて言うわけがない。言うわけがないが、じゃあなぜ今霊夢が言ったように特に何も考えることなく断ることを前提において霊夢に相談に来たのだろう。そもそも告白を断るのに理由がいのだろうかいやそれはもちろんいるだろうけど自分にその理由があるのか。性格や容姿もまともには知らないのだからそのあたりをもう少し考慮してから結論を出すべきだったのだろうか。いやいやというか今こんなことを考えている時点でもう明白なのではないか。

「……いえ、特に、理由があるわけでは」

「やつぱりね。だから考えが浅いつて言ったのよ。考えが浅いどころか、あんたもしかしてまともにも考えもしなかったんじゃないの？ 条件反射みたいに、告白されたから断ろうみたいな短絡的な思考だったんじゃないでしょうね？」

「……否定は、できませんが」

霊夢の言葉に明確な反論ができない。自分にだって断る理由ぐらいあるんだと言い返してやりたいが、事実霊夢の言っていることは華扇の凶星を突いているのだから否定

なんかできるわけがない。

告白された瞬間に、直線的に断るといふ答えと結びついてしまったから、そんなこと考えもしなかった。振り返りもせず、思い返すこともなかった。

だって、普通そうだろう。

それが、普通なのだから。

「……でも、それでなにか問題があるの？ 私が何も考えないままに告白を断って、それがなにか駄目？ 霊夢は、私はその告白を受けた方がいいって思ってるの？」

「別にあんたが誰と恋仲になるとか、誰の告白を断るとか、私はそんなのどうでもいいのよ。どっちでもいい。失恋も、成就も、そこらへんに掃いて捨てるほどあるんだから。それこそ落ち葉みたいだね。私が言いたいのはそこじゃなくて、あんたが何も考えてないってこと」

「考えていないわけでは……」

「検討も想像もないまま、流れと惰性で何かを決めることを何も考えてない以外になんて言えばいいのよ」

「……それは」

これじゃあ、普段とは立場が逆だ。いつもは華扇が霊夢に説教をしているのに、今は自分が霊夢に説教をされている。別に不快であるとかそういうことはないが、その原因

が色恋沙汰というのがなんだか変な話だ。

「言つとくけど、別にこれは説教とかじゃないわよ」

一瞬だが心を読まれたのかと華扇は驚くが、霊夢はなんだか自分の口調が説教のようになつてゐることに気付き、自分で否定しただけの話だ。

「これは単なる私の自己満足。あのね、仙人のあんたは若干忘れがちかもしれないけど人の寿命は短い。花火よりも短い。花火みたいに人の記憶に残ればいいけど、大抵の場合そう都合よくはいかないわ。大体の人生は不発で終わる。あんたに告白してきた男は、花火を打ち上げたのよ。確かにあんたには、それを不発で終わらせるか、それとも咲かせるかを選ぶ権利がある。でも、権利は自由と等価値じゃない。打ち上げられたことにも気付かずに、選択することもなく不発で終わらせたのなら、それは権利を逸脱した冒瀟よ。私は、そういうのは氣に入らない。それだけよ」

霊夢は一氣にそう捲し立てる。慣れないことをいつまでも続けるのが少し恥ずかしくなつてきて、駆け足で終わらせたのだが、なぜここまで真剣に語つたのか霊夢自身にもわからなかつた。人の氣持ちを蔑ろにするのが氣に入らないという霊夢の個人的感情ならばあるのだが、別にここまで言わなくてもという氣持ちもある。

だが、誰かが何かを伝えたというそれが、どれだけ勇氣のいる行為なのかを霊夢は知つていた。



とにかく、言いたいことは言い終わったので、さっさと境内の掃除を終わらせてしまおうと思い、箒を握りなおすと、華扇が口を開いた。

「告白を断るといふのは、そんなに重い行為ですか？」

一瞬の沈黙の後、か細い声が聞こえた。

「……する方にとつては、投げたものを相手が受け取ってくれるかどうかの保証もない状態よ。投げたものがどこか自分の手の届かないところに転がっていつてしまうかもしれないっていう恐怖を感じてる。それはきつとすごく重い。自分が潰されかねないほどこに」

「……………」

「それを断るっていうのは、その重いものを受け取らずに受け流すってこと。断ることは、きつとそんなに重くない。でも……、受け流した時に、きつとその重さを感じる。感じて、実感する。受け取らなかつたんだ、ってことを。……それに対してどういう感情を抱くかは、人それぞれだと思っただけね」

霊夢はそう言い終わると、今度こそ顔を背け掃除を再開する。その後ろ姿は、以前自分が巫女らしからぬと叱りつけたものなのだろうか。少しだけだが、なんだか霊夢が離れて行ってしまったように感じた。

ただ、話が終わってしまったかのようだが、華扇にはどうしても一つだけ気になるこ

とがあつた。今の真剣な空気を壊すことになつても、聞きたいことが。

「霊夢は、告白されたことはあるの？ さつきのは、経験者ならでは助言なのかしら」

「……………」

少しだけ、沈黙が二人を包む。

角度的に、華扇から霊夢の表情を伺うことはできない。だが、雰囲気は否応なしに伝わってくる。聞くべきではなかつたかもしれないと後悔するが、後悔先に立たずというやつだ。しかし、いまいち判断がつかない。この沈黙の重さは、何に起因するものなのだろうか。

霊夢が、箒を握つたまま振り返る。

口元に、影を帯びた笑みを浮かべながら。

「——さあ？ どつちだと思つて？」

なんとなく、華扇は頭のシニヨンキャップに触れた。そこに深い意味はない。さつきの霊夢の言葉を反芻していたら、無意識のうちに手をやっていただけだ。頭が痛いのは事実だが、頭を押さえても治らないのはわかつていた。

拒否する。

快諾する。

華扇の前には今、二つの道があつて、そのどちらもが正解の道なのだ。華扇の人生においては、華扇が選んだ道こそが正解であり、そこに他者の介入は決して存在しない。その人の人生はその人だけのもの。華扇だつてそれは理解しているが。

あの時あの道に進んでおけば良かったなどという後悔は、必ずと言っていいほど誰しもが経験しているものだ。一度進めば引き返せない。

片手で団子の串を弄びながら、自分の気持ちを持って余す。

何も考えずに食べている時ほど食べすぎる。すでに団子の皿は五枚も積み重なつており、一皿に三本ずつ乗つていた団子はとうの昔に華扇の胃袋の中だ。右手の串を皿に置き、右手を見つめる。

右手よりも、包帯を見つめていたといった感じだが。

これもまた、告白を断るといふ考えに至つた一要因でもある。

今日は、いつものような視線を感じることはまだなかつた。先日の行動もあつて自粛しているのか、他に何かしらの用事があるのかは華扇の知らぬところだ。だが。

見られている感覚がない方が団子は美味しい。

それだけは確かなことだつた。

生憎と空には雲が満ちていて、あまり晴れ晴れとした気分とは言えないが、霊夢との会話を思い出し出しているうちに心の陰りが晴れてきたのは確かだ。別にどうするか具体的に決まってきたというわけではないが、なんとなくの方向性は見えてきたと言つても間違いいではないだろう。

何も考えずに告白を断るな。霊夢はそう言った。正直言つてぐうの音も出ない正論だったと今はすっかり自覚している。しかしこう言つては何だが、やはり自分と男では立場が違う。

仙人である華扇と、普通の人間である男。

生活は違うし、住むところも違うし、考え方も違うし、そしてなにより寿命が違う。わかつてはいるのだ。男だつてそれを承知の上で華扇に想いを伝えてきたのだろうし、霊夢だつてそれを踏まえても適当に返事を返すべきではないと箴言してくれた。自分だけが真剣ではなかった。検討の余地も挟まないほど弾圧的に告白を断ろうとしていた。

その考えを改めるならば、自分は一体どう返答するべきなのか。

方向性は見えたと言つても、具体的に答えが定まったわけではないのだ。

短く息を吐く。ここまでなかに悩んだのは、果たしていつぶりだろうか。考えることに若干の疲れを覚え、なにも考えずに爪先を見つめっていると、頭上から声が降つてき

た。

「あら、どうもこんにちわ。なにやら元気がないように見えますが……どうかなさいましたか？」

聞き覚えのある声に顔を上げると、白を基調とした巫女装束を身に着けた少女が不安げな表情で華扇を見つめていた。守矢神社の風祝、東風谷早苗である。右手に風呂敷を抱えているのを見ると、買物物の帰りと云ったところだろうか。

「いえ、別に大したことでは……。というより、貴女もどうしたんですか？」

「え？ なにがですか？」

「右足の包帯ですよ。結構広い範囲に巻かれていますね、怪我ですか？」

声のした方向を見ようと顔を上げたときに、足に巻かれている包帯に気付いた。いつもと違い、足が露出されていたために少し目立っていたからなおさら目に入ってきたのだが、先に言った通り、右ふくらはぎのかなり広い範囲がぐるぐる巻きだ。大分痛々しい。

「ああ、これですか。……実は数日前に森で妖怪に襲われてしまいました、ご覧の有様です。情けない限りですよ。森の妖怪を甘く見ていました。貴女も気を付けてくださいね」

早苗は、ばつが悪そうな顔をしながら華扇に事情を話す。華扇的にはなんと云うか意

外だ。巫女つて怪我するんだと言いたい気分だった。魔理沙が怪我をしているところなら見たことがあるが、霊夢が怪我をしているのは見たことがない。というか、幻想郷において巫女と言う呼称は、若干ながら強さの代名詞みたいな部分がある。だからこそ、心配でもあるのだが。

「ですが、包帯と言うのでしたら貴女だつて右手がそうじゃないですか。あ、お揃いですね、お揃い！」

先ほどまでのばつが悪そうな表情はどこへ行ってしまったのか、目を輝かせ、笑みを浮かべながら華扇に顔を近づける。嫌なお揃いもあつたものだ。怪我の重症具合の一致で燥げるというのは一体どういう感性をしているのだろうかと思うが、ひよつとしたら明るい雰囲気しようと思つてくれたのかもしれないと思いなおす。もしそうだとしたら申し訳ない限りだ。

「確かにお揃いですね。お互いに早くお揃いでなくなつた方がいいとおもいますが……。えっと、とりあえず座りませんか？ 立つたままでは足に響くでしょう？」

団子の皿を挟んだ長椅子の反対側を左手で示しながら、少しだけ皿を自分の方に寄せた。実際、積んである皿の枚数にいつ突つ込まれるだろうかというのは非常に不安だったが、早苗は特に指摘することもなく、風呂敷を足元に置く。

「いいんですか？ じゃあお言葉に甘えて座らせていただきますね。よいしょつと

……。ふう、やっぱり怪我をしたまま歩くものではありませんね。行く先々で心配されてしまつて……」

「いいじゃないですか。心配されるのも人徳の賜物ですよ。貴女の日々の努力の成果と言ひ換えても構いませんが……。こう言つては何ですが、霊夢ではそうはいかないでしょう」

早苗の言葉に華扇が前向きな言葉を返すが、早苗は寂しそうな笑顔を浮かべ俯いてしまった。自分は何か変なことを言つてしまったらどうかと華扇は内心で戦々恐々だが、早苗はすぐに顔を上げる。

「そうですかね……。すいません、私もお団子頼んでいいですか？ 食べたくなつちやいました……」

恥ずかしそうに華扇にそう言つと、近くの女性に団子を一皿注文する。漉し餡と粒餡のどちらを頼むのか耳を澄ましていたが、早苗が頼んだのは御手洗団子でなんとも言えない気持ちになつた。そして同時に、やはり五皿はどう考えても食べ過ぎだという結論に至る。注文を終えた早苗は、少し笑いながら右足の包帯に触れる。

「我ながら情けないですよ……。なんでもないような下級妖怪にこんな怪我を負わされるなんて……。透明になれるんだか、気配を消せるんだかみたいなの能力を持つてたみたいで、不意の一撃でこのざまです。弾幕に慣れ過ぎてたつてことかもしれませぬね。

まったく……」

なんという返しが正しいのか、華扇にはわからなかった。ここ暫くの間は怪我らしい怪我などした記憶がないし、もつと言うなら最後に怪我をしたのがいつかなんて覚えていない。下級妖怪にしてやられたことで誇りが傷ついている巫女にかければいい言葉なんて、思いつくはずもなかった。黙っていると、御手洗団子が運ばれてくる。早苗は曇りのない笑顔でそれを受け取り、皿を椅子に置いて一本目を手に取る。それを口元に近づけながら、早苗は口を開いた。

「さっきの話に戻っちゃうんですけど——霊夢さんなら、って話です。私は、霊夢さんならそんな失敗はしらないと思います。思っています。霊夢さんは、強いですから。たぶん里の人たちも、そういう安心感はあると思います。博麗の巫女は絶対に敗北しないっていう、不動の安心感が。だから今日もこうして、妖怪に怯えずに甘味処は営業中なわけで、私はその恩恵を被りお団子を食えることができます」

そう言い終ると、団子を一口。咀嚼し、思わず破顔。その一方で華扇は呆気に取られていた。なんだか深刻そうな感じで始まった話が結果的にそう着地するとは。ありがたい意味で予想外だった。これ以上に話の先が暗くなってしまうと本当に黙りっぱなしになってしまう。ただ、それと同時に、今、ほんの一瞬だけ見え隠れした間違いのない博麗霊夢に対する劣等感。無理に話の最後を明るい方向へ持っていったのだろ



うことを考えると、たぶん今のは、早苗にとつてもあまり表に出したくない本音なのだろうと思う。掘り返さない方がいいだろうと結論付け、今度は華扇から話を振る。

「……脈絡のない質問になりますが、貴女は、好きな人ついていますか？」

「ぶっ。げほっ、ごほっ……。な、なんですか急に。藪から棒に」

「す、すいません。少し気になったから聞いただけで他意はありません。まさか吹き出すとは思っていませんでした……。すいません、不躰な質問でしたね」

早苗の反応を見て申し訳なくなったのか、肩を落としてしよんぼりとした顔をする。本当に他意はなかった。直前の会話が少し暗かったので、なにか明るい話題はないだろうかと考えて、今の自分の状況からついそういう質問になってしまっただけなのだ。なにか自分の考えを先に進めることのできる意見が出てくるのではないかといった期待が無意識になかったかと言えば、それはわからないが。

「……もしかして」

「え？」

「好きな人がいるんですか!? そういう質問をするっていうのはつまり私に！ 助言を

求めていると！ そういうことですか!? そういうことですよね!？」

「え、ちよ、いや」

「お任せください！ 不肖ながらこの東風谷早苗が！ 現人神として、風祝として！

あなたの恋を成就させるべくできる限りのお力添えをいたしましたしように！」

その直前に好きな人がいるかどうかを聞かれて、吹き出していた者の発言とは思えないほどに元気澆刺とした言動に華扇は圧倒される。理解できない者への恐怖心からまともな言葉を返せないが、現段階ですでに信じられないくらいに誤解が発生しているし、目の前の現人神は先走っているし。とうかなにこの食いつきっぷりはという混乱が隠し切れず眼球がぐるぐると回転する。団子を食べていたのに立ち上がって顔を近づけてくるし、目にはどういう理屈か無数の星が瞬いているしで、華扇の許容量はとつとつに限界である。

「待つてください！ 待つてください！ 誤解です！ 違うんです！ 好きな人もいませんし助言も求めていますから落ち着いてください！」

いっぱいいっぱいになりながらなんとか言葉を返す。このまま押され続けていたらしてもいけない恋煩いを自供させられそうという恐怖が、華扇に言葉を取り戻させた。否定の言葉を並べられると、早苗はきよとんとした顔になり、少し首を捻り、薄く困ったような笑顔を浮かべた。後ろに下がって椅子に座りなおすと、持ったままだった串についていた最後の一つを口に入れ、その串を皿に置き、団子を飲み込む。

「なんと言うか、すいません。こちらに来てから初めてそういう話に触れたもので……。私たちってみんな年頃の女子なのにそういう浮ついた話の一つもないっておかしくな

いですか？ 少し前から、誰か一人くらい、そういう話で盛り上げられる人でも思っていますか？……」

「なんだか、こちらこそすいませんでした……。……まあ確かに、色恋の話で盛り上げられるような人って、全然思い浮かびませんね」

「そうなんですよ！ 霊夢さんや魔理沙さんにこういう話を振ると煙たがられますし、咲夜さんや妖夢さんだと仕事が忙しいからそんな暇はないとか言うし！ 鈴仙さんに至っては引き笑いされましたからね！ もう少し女子としての自覚を持つてほしいものです！」

「……そういう貴女はあるんですか？」

「へ？」

「恋愛経験が」

華扇が短く尋ねると早苗は顔を逸らして黙り込む。おそらくはこうなるだろうことを華扇は予測していたし、だからこそ口に出して尋ねたのだ。人のそういう話を聞くのは好きだが自分がどうかと言えば恥ずかしくて黙り込んでしまう。普通の女の子らしい感性を持っているんだと思うが、この幻想郷でその感性を持ち続けるのは正直しんどいだろうという心配もある。可愛いがしかし可哀想である。足の上で組まれた手が所在なさげにもしよもしよと動いている。

「……まあ、私もありませんけどね。今に至るまで重ねてきたのは年齢だけですよ。とはいえ、仙人が一体どうやって恋愛なんてするのかって感じですけどね」

多少の自虐を混ぜながら言葉をかける。これは偽らざる華扇の本音であったし、今一番の悩みの種となっている部分だ。向こうが少し本音を喋ってくれているのだ。こちらでも少し本音を語るくらいで対等だろう。溜め息とともに言葉を吐き出すと、早苗が背けていた顔を前に向けた。

「……ないことはないんですけどね、そういう経験。外の世界にいた頃は何度か告白されたこともあります。でも、全然そういう気になれませんでしたし、どちらかと言えば神社にいる方がよっぽど充実してました。人のそういう話を聞くのは楽しいんですけどね」

笑いながらそう言うと、二本目の団子を手に持つ。華扇は店員の女性にお茶を二つ頼み、団子を食べる早苗の横顔を見る。同性から見ても整っている顔だと思う。髪に付けている装飾は少々独特ではあるものの、それも可愛さの一つにできるほどに。運ばれてきたお茶を冷ましながら口に入れる。お礼を言いながら早苗もお茶を飲む。

「えっと、一応お聞きしますが、そういうお話をしてきたということは、そっち方面のお話が何かあるのでは？ これもまた勘違いだったら申し訳ないんですけど、先ほど声をおかけした時も上の空でしたし、私でよければ相談に乗りますよ」

二本目の串を皿に戻しながら早苗は言う。感情の機微に聡い人だと思う。感情豊かで感受性も豊かで、里で演説をするほどの社交性を持ち合わせているのだ。外の世界で告白されたのも当然と言つていいかもしれない。同性への対応まで心得ている。あとは先ほどのような暴走さえなければ完璧なのだけれど。

「……では、少し聞いてもらつてもいいですか？」

二連続で巫女に相談するのはなんだかこの幻想郷においてとても贅沢なことのような感じがしたが、むこうから聞いてくれたのだ、ここで答えなければむしろ失礼と云うものだろう。そう思い、華扇は重い口を開く。少し前から里の中で誰かに後を付けられていたこと、数日前とうとう限界がきて振り返つたら告白されてしまったこと、断ろうと思つていたが霊夢に説教されてしまい今は悩んでいること。口を開く前は相談を軽く考えていたが、途中で死ぬほど恥ずかしくなってきた。なんで告白までの経緯を懇切丁寧に説明しなければならぬのか。顔から火が出そうだ。この間霊夢に説明した時はこんな感じではなかつたのに、なぜ。

「ふむ、ふむ……、なるほどなるほど。……あれ？ 終わりですか？」

「終わりですが？ どこか説明が足りない部分がありましたか？」

「……………」

華扇の反応を受けて、早苗はなんとなくではあるものの納得した。あの霊夢が、色恋

沙汰などに一切の興味を持っていなさそうな霊夢が口を挟んだその理由を。心の中だけで少しだけ笑う。結局あの最強の巫女も人の子で、根底がお人好しなのだ。本人を目前にしたらそんなこと絶対に言えない、もし言ったらどんな目にあわされるかなんて想像したくもない。ある特定の相手からの褒め言葉をあまり霊夢は好いていない節があり、その特定の相手の中には勿論のこと東風谷早苗も含まれている。一定以上の力を持った距離の近い人間からの褒め言葉を好いていないのだろうと推測しているが、そう考えるとなんだか可愛い。これも本人には言えないが。

「んーと……、なんて言うんでしょう。貴女は、どういう返事をしたいんですか？」  
「……………」

「質問を変えましょう。受けたいですか？ 断りたいですか？」

「……仙人が人間からの告白を受けてもいいものかという思いがあるので、断るのを前提にしていたのですが、霊夢からの説教でよくわからなくなってしまうました。なんだか、受けても受けなくても、どっちの答えも間違っている気がして……」

俯きながらそう言う華扇に、早苗は、複雑だ、と思う。この幻想郷には人間よりも多いかもしいれないほどの人外が住んでいて、その誰もが例外なく長い寿命を持っている。だからこそ、人間とそれ以外の間には深い溝があるのだ。早苗の近くのあの二柱だつて、無限に等しい時間を持っているし、いったい自分はいつまで彼女らと一緒にいられ

るのかという不安もある。それを完全に払拭することはおそらく無理だ。だが、だからって。

「寿命差、ですか。お気持ちは察しますよ。私も、神奈子さまと諏訪子さまとどれくらい一緒にいられるのかわかりませんし」

「……ちなみに貴女ってどれくらい生きられるんですか？」

「どうなんでしょうかね、その辺って。現人神を名乗ってはいるものの、もちろん神じゃありませんし、かと言って死んだら神格化するのかとといったらよくわかりませんし……って、そうじゃなくてですね。今は私のことじゃなくて貴女のことでしょう」

話が脱線しかかったものの、どうにか軌道修正する。わざと華扇に話をずらされなかったような気もしないではないが、その気持ちもわからなくはないのでわざわざ言うことはしない。実際、この幻想郷において寿命の差というのは悩まざるを得ない事柄であることに間違いはないのだから。だから、正直正面切っては言いにくい。ただ、恋愛経験が一切ないというのはなかなか厄介だというのは理解したからこそ、言わなければ伝わらないというのもまた事実だった。

「……私が思うにですね、貴女は少し恋愛を神聖視しすぎていると思うんです」

「神聖視……？ 私、私が、恋愛を、ですか？」

「はい。そもそも先ほどから話を聞いていて、言い方は悪いかもしれませんが、貴女の考

えは固いということが分かりました。由緒正しい家柄の箱入り娘じゃないんですから、たかが一度の恋愛を、そんなに重く感じる必要はないかと思えます」

由緒正しき家柄の箱入り娘とは。随分堅苦しい肩書を例えに持つてきたものだ。そう華扇は思うが、早苗からしてみればこの例えでももう少し足りないくらいだった。おそらくは数百年単位で恋愛をせず、仙人でい続けたのだろうことを加味すれば仕方のない姿勢かもしれないと、情状酌量の余地があることは認めざるを得ない。だが、それでも固いのだ。自分を大切に行っているとか、清潔さを保っているとか、そういう風に捉えることはできるが。

「酷い言い方をするとですね」

「はあ」

「貴女は男女の恋愛に少々ばかり夢を見過ぎかと」

早苗の言葉に華扇は目を丸くする。これまた随分な言い方をしてくれるとは思ったし、言おうとしたのだが、喉より先に言葉が出てこなかった。目の前の巫女の、真剣で、それでいて心配さを滲ませた目を見たら何も言い返せなくなってしまったし、心のどこかで凶星を突かれたと思うている自分がいるのもまた確かだったからだ。夢を見過ぎ。神聖視。考えが、固い。

「嫌な言葉を使いますが、告白されて付き合ったから今生は添い遂げなければならぬ



なんて考えは前時代的だと言わせてもらいます。人には相性の合う合わないがありませんし、一時の感情の昂ぶりで恋人になっちゃったけど今は後悔しているなんてよくある話です。少なくとも、私が知っている限りでは。人はずっと仲良しではいられないというか、どうしたって感情には波があるものですからね」

「ですけど、一番最初の相手と添い遂げられたのならば、それは素敵なことではないですか?」

「まあ、素敵ではありませんよ。私だってそうなりたいと思っていないかと言われれば思っていると言えざるを得ません。ですけど、それをなせる可能性は途方もなく低いということも理解してください。理想と現実の壁といいますか、厳しいところと言いますか……。えーとですね、要するに私が何を言いたいかと言うとですね、一回目の男性がラストチャンスではないということですよ」

最初から上手くいくものは何事にしても少ない。それは仕事にしても勉強にしても交友にしても接待にしても挑戦にしても試験にしても練習にしてもそうであり——恋愛にしたって同じだ。双六のようなものである。良い目が出るかもわからない悪い目が出るかもわからない。どの時点で最上の当たりを引き当てることができるかは完全に運否天賦だ。たかが一度の恋愛——されど最初の一回。

「ですが、私は、だからと言って軽い気持ちで、お試しのような気分であの真剣な告白に

こたえることはできません。失敗してもいいからやってみようは確かに真理かもしれませんが、でもできるなら、私は……成功を掴み取りたい。数多の可能性の中から、唯一である成功を」

「……ま、そりやそうですよね。知ってますよ。私だつてきつと貴女と同じ立場だつたら同じように答えたと思いますもの。どうせだつたら最初が最後であつてほしいものです」

直前までの真剣な表情を崩し、包帯の巻いてある足を前後に動かす。早苗だつて何も本気で男なんて幾らでもいるからとつかえひつかえしてもいいんですよなんて言っていたわけではない。最初は一回しかないのだ。二回目はもう最初ではない。最初が最後であるというのは、少女にとって最高の成功だろう。ただ、少し解そうと思っただけなのだ。数百年の間にすっかり固まってしまった華扇の貞操観念と言うか、男に対する免疫のなさと言うかを。ただ別に早苗だつて、前述の通り経験豊富というわけではないが。

「……そう思っているのに、私をあんな風に焚き付けようとしたんですか貴女は」

「そうじゃなくてですね、私にだつてわかりますよ。どうせ私が何を言おうと、きつと貴女は参考にするばかりで、そこに答えを見出そうとはしないって。話してる最中に分かりました。私じゃ、貴女のお力にはなれません」

小さく溜め息を吐きながら早苗は言う。その溜め息はひよつとして自分に向けられているのだろうかと華扇は少し不安になったが、早苗の表情を見るに、どうも自分自身に対するもののようにだった。それはそれで不可解だ。彼女の望む通りに動くことがなかったのは自分のせいなのだから、その失望を表すかのような溜め息は自分に向けるべきなのに。そうは思うが、その直前に早苗が言った言葉がどうにも引かなかつた。

「あの、話してる最中に分かつたって、なにがですか？」

「……気分を害すつもりでの発言ではないというのを先に言っておきます。貴女は、霊夢さんや私に相談しつつも、多分もう心の中で告白に対しての答えを出し終わっている。霊夢さんはきつとそれもわかつていたんだと思います……」

そう言いながら、早苗は三本目の団子を持つ。続きを話す気がないわけではない。口に出す言葉を慎重に選んでいるのだ。あの霊夢が口に出して言おうとしなかったのだ。普段は相手のことなどお構いなしにずけずけとものを言うあの霊夢が。言い方を変えれば、気を遣った。ならば、自分もそうあるべきだろう。咀嚼した団子を飲み込み、再度口を開く。

「貴女が返事に悩んでいることを嘘と言うつもりはありません。貴女が本気で悩んでいる事に嘘はない。でも、きつと到着点は一緒なんです。辿る道が違うだけ。極論、今ここにいたのが私じゃなくても、貴女はきつと同じ答えを出したと思います。だから、私

から言えるのもうこれだけですな」

早苗は困ったような、でも笑ったような表情を浮かべながら、右にいる華扇を見つめる。ああ、これは、惚れるのも無理ないかななんて、そんなことを思いながら。

「悩むだけ悩んでください。きつとそれが正解です」

なんだか多少の匙を投げられた感があるが、早苗は顔では笑っていても、それは軽薄な笑みではない。目の前の人物に不信感を与えずに安心させるためにするような優しい笑顔。だから、華扇もそれに笑って言葉を返すことができた。一言だけだが。

「……はい」

「ところで話は変わるんですけど、名前でお呼びしてもよろしいですか?」

「え?」

言った通り本当に話が変わったし、全くもって今までの話と共通点がないし、関連もないし、ここまでの話のどこにそんな要素があったのかもわからないしで内心でこままだ。話の内容がころころとよく変わるのが女子なのですと、早苗なら言うだろうが。よくわかっていない顔をしている華扇に早苗はもう一度同じことを言う。

「貴女のことをですな、お名前でお呼びしたいのですがよろしいでしょうか?」

「……え、えつと、なぜ急にそんなことを?」

「先ほどから話をしていて、貴女貴女と言うのもなんだか呼び難くて。できれば名前で

「呼びたいと思ったんですけど、駄目ですかね？」

「いえ、別に構いませんが……」

華扇がそう言うと、早苗は両手を小さく握りしめる。実際、なんだか目の前の仙人に今まで距離を感じていたのも事実なのだ。だが、恋愛の相談をしてくれたという事実がここにできたことで、なんだか親近感を覚えることができた。ここで距離を詰めずにいつ詰めるというのだ。引かれようが気持ち悪がられようが、名前で呼ぶという既成事実さえあれば、後々の関係などどうにでもなるのだ。

「ありがとうございます！ それで、お名前をお聞きしてもいいですか？」

「……茨歌仙、です」

「……それは仙人としてのお名前でしょうか？ あー、もしかして名前を教えられない事情のようなものがあつたりとか……」

「えーと……」

実際その通りだ。本名を教えるのはどうにかして避けたい。霊夢たちにだって言うていないし、一番伝わってはいけないのが霊夢でもある。どうしたものかと考える。ここで早苗の頼みを無碍に断るのは簡単だ。だが、それでいいのかと思う自分がいる。思えば、自分は目の前の少女を名前で呼んだことがない。それは、どうなのだろうか。じゃあどうする。妥協だ。

「……華扇」

「はい？」

「華扇、です。私の名前は。華扇、と呼んでください」

「……はい！ ……ちなみにどういう漢字ですか？」

「えっと、蓮華の華に、扇で……」

早苗は最後の串に残った団子を綺麗に食べきつて、お茶を綺麗に飲み干す。皿の近くに自分が食べた分の代金を置き、そして足元の風呂敷を持って立ち上がった。右に体を回し、悩める少女の顔を見る。最初よりはすっきりとしている気はするが、まだ曇っているようにも見える。力不足かな。

早苗は、はつきりとした笑みを浮かべ、しっかりと口を開いた。

「頑張ってくださいね、華扇さん！」

「ありがとう……、……早苗」

不意に呼ばれた自分の名前に、つい顔が綻ぶ。こういう類の喜びは、抑えようと思つて抑えきれぬものではないのだからしょうがない。

途中何度か振り返り、手を振りながら早苗は神社へ帰った。華扇もそれに手を振り返した。

その二人の様子は、親しい友人のようだった。

早苗の頬の緩みは結局神社に帰るまで止まらず、それを見た神奈子に心配されることになったのは、また別の話。

## 3 正誤

数日後、華扇は人里を歩いてきた。手になにか食べ物を持ってきているわけでもなく、どこか美味しそうな店を探しているわけではない。さすがにそんな四六時中腹を空かしているわけではない。彼女は人を捜し歩いていた。その相手は言わずもがな、例の男である。

早苗から助言をもらって早数日が経ち、どうするかが見えてきたのでわざわざ人里まであの男に会いに来たのだ。自分の中の感情が変に揺らがないうちに言いたいし、こういうのはなるべく早めに伝えるべきという、仙人らしい固い常識が華扇の中にはあった。どこぞの邪仙がどうかは知らないが、仙人だつて十人十色なのだろうが。

にしても。

「……見つかりませんね」

もう人里で男を探し始めて二時間は経っている。こうも見つからないと告白時のいろいろな問題点がどうにも細かく気になって地味に腹が立つてくる。

いつまでに返事を下さいとか、答えが決まったらここに来て下さいとかあるだろうに、なぜそういうことをあの男は言わなかったのか。あの時は男は緊張していたし、自



分は固まっていたしで仕方ないと思つてしまつていたがよくよく考えたら全然仕方なくないぞあれは。人に想いを伝えるなら必要最低限の礼儀というものがあるだろう。そもそも数日間自分は後をつけられていたのだ。変質者に告白という形で犯行を誤魔化されたみたいな告白のどこに早苗が求めるようなときめく色恋が介在する余地があつたというのか。

考えれば考えるほどにあの告白の不完全な点が溢れてくるものの、今更それで返事が変わるとかはあり得ない。自分の中でもうすでに固まつている答えだ。それなりに優柔不斷であるという自覚はあるが、意志が弱いつもりはない。

なにせ仙人掌なのだから。

不完全というなら、自分の答えだつて相当に不完全なものではあるが。

結構早いうちから探し始めたのでまだ正午くらいではあるが、段々と今日はもう見つからないのではという気がしてきた。数日前に早苗と話していたときも、思い返せば視線は一度も感じなかつたし、もしかして見つかつた勢いで告白したはいいものの、恥ずかしくなつてしまい姿を見せないようにしているとか。

こつちだつて恥ずかしかつたですよ、と叫びたくなるが、あくまでも冷静に。

冷静になつて一回何かを食べよう。

そう思い立つてからの行動は迅速だつた。近くのそこそこ人が入っている蕎麦屋に

入り、蕎麦を一杯注文する。一度も入ったことのない店ではあったが、何故か慣れた風  
に振る舞う仙人。

もしかして探し人がいたりしないだろうかと店内を見渡すが、やはり見つからない。  
日が悪いのかなとも思うが、なるべく早く見つけたいところだ。不味いのだ。もうそろ  
そろ男の顔を忘れそうである。

視線を感じたらあの男だろうなと思つていたので、そんなに顔を忘れることに危機感  
は覚えていないが、本当に少しだけ申し訳ないなと思う気持ちがないわけではない。実  
際に忘れたらそれはそれで困るし。

運ばれてきた蕎麦を行儀よく啜りながら、一昨日のことを思い出す。

「告白？ ふーん……。そりやおめでたいことだ。よかつたじゃん？」

「何がよかつたの？ 私が今困つている現状で貴女に一体何の得があるの？」

「いや、別に私に得があるわけじゃないって。そんなに怒るなよ」

瞬時に放たれた華扇のオーラに圧され、焦つたように手を横に振る魔理沙。怒らせた  
りするとそういうところばかり仙人らしく面倒臭いというのは知つていたので、誤解が  
まだ初期段階の内に明確に否定しておかなければならない。

もし相手が霊夢だったならばここで誤解を否定せず、こじらせることで更に面白い方  
向に持つていくことも出来ただろうが、流石に霊夢と同じような対応をしていい相手を

選ぶだけの分別は魔理沙にもあった。というか、魔理沙の他者へのからかいは、あくまでもそれをするに適している相手にだけ行われる、言ってしまうえば信頼と理解の証だ。かと言つて、別に魔理沙は華扇を信頼していないというわけではない。からかひにも種類というものがあるのだ。

不審な部分が多すぎるので、完全に信頼しているとこのわけもないのだが。

「じゃあ何が良かったつていうの？ 私は今凄く困っているんだけど？」

「………本当か？」

「え？」

「お前、本当に今困ってるのか？」

「……………ここ数日思うんだけど私ってそんなに分かり易いのかしら？」

霊夢にも早苗にも、言っていないことを表情や雰囲気から読み取られているという事実。に若干の危機感を華扇は覚えていた。そもそも自分は基本的に隠し事をして立場だ。誰かに悟られては不味いような種類の隠し事を。

萃香にはほぼほぼばれているようだが、それでも誰にもまだ悟られていない隠し事だつてしている。それらも全て読まれてしまうような分かり易い仙人であつたならば、これまでの努力含めいい面の皮だ。

ただでさえ、異変すら直感で解決できるような常識外の巫女と、他者の僅かな変化す

ら敏感に察知する魔女を日常的に相手にしているのだ。もしそうなら何かしらの対策を講じる必要があるわけで。

それに関しての疑問をその本人に投げかけるのが何かおかしいのは分かっているが。

「いや、普段のお前はわからんよ。全く分からん。でも今のお前は分かり易い。前々から思ってたけどさ、お前って不測の事態に弱いよな。ちよつとだけど」

「そう……かしら？　自分ではそういう感じはないけど」

「自覚があつたら直してやるだろ。まあ今回の場合は、あたふたしてる、って言うべきなのかもな」

「あたふたって……」

「浮足立ってる、でも可だ」

自分自身ではそこまで追い詰められているという認識は無かったのだが、魔理沙から見るとどうやら自分は相当な所まで来ているらしい。華扇としては、最初から今まで、結論を出すのこそ遅れたものの、一貫して落ち着いて対処できていた気がしていたのだが。

霊夢や早苗がそれを聞けば、苦笑いを浮かべること必至である。

少なくとも、誰かに助言を求めた者の認識ではない。

「普段の振る舞いを思い出してみるよ。いつもの落ち着いた感じの上から目線がどこに

もないぜ?」

「……私って普段魔理沙にそういう風に見られてるの? まあ、周囲に教えを広めるのも仙人の役目ではあるから、自然に上からみたいになってしまふのは見逃してほしいんだけど……」

魔理沙に他人をよく見ているという自覚はない。彼女はあくまでも自分が思ったことを素直に口に出しているだけだ。嘘つきだが、決してそれはほら吹きではない。

おそらく、幻想郷において嘘を最も自分にとって有用に使っているのが誰かというならば、紫、幽々子に次いで、魔理沙がランクインするだろう。

「ていうかそれだと私らしさの象徴が上から目線みたいじゃない?」

「違うのか?」

端的に言う魔理沙。肩を落とす茨歌仙。

自身の思い描いていたものと、周囲からのものがあまりにも違い過ぎることにショックを隠せないわけだが、今の自分を鑑みて、確かに分かり易いのもかもしれないと思う。自分に正直であると言えば聞こえはいいが、周囲に見せびらかすことになってしまっているのは自他共に迷惑以外の何物でもない。

不幸自慢の類だ。

誰がいい顔をするというのか。

自分の言ったことと華扇の露骨なりアクションに少しだけ意地悪気な笑みを浮かべる魔理沙。

「冗談だよ冗談。確かにお前は説教が多いがそれが象徴とまでは言わんよ。お前らしきではあると思うけどな。自分でも多少はそう思うだろう？」

「……否定はしないけど……」

改めてそう言われると肯定もし難い。それを認めるとなんだか凄い口煩い奴みたいになる。

誰かの為に行っている行いのはずなのになぜ自分でもそれを素直に認められなくなっているのだろう。なんだかなにかが逆転している気分だ。矛盾している事柄というのはそこまで嫌いではないが、当事者が自分の場合のそれは決して好きにはなれない。

しかもこの場合、それは決している意味にはならないのだから。

「そういうところ含め、そいつはお前に惚れたんだろ？ だったら、伝えるべき言葉はそんなに多くないはずだぜ？ そして、お前自身、もうそれに気付いてる」

「……まあ、ね」

「私にその話をしたのだから、別に大した意味があるわけじゃないんだろ？ ただなんとなく自分の選択に自信がなかったから、私に話を振って反応を見てみよう程度でしかなかった感じが凄い出てるぜ」

「それは、何と言うか、すみません……」

魔理沙も別に気分を害したというわけではなく、その顔には笑みが浮かんでいた。ただ、今回の件は下手に茶化すべきではないのをつかりと理解していた魔理沙としては、ここで自分が浮かべるべき表情を決めかねてもいたのだ。

霊夢が目の前の仙人に対して、どういう言葉を送ったのかはある程度の察しがつく。魔理沙は霊夢を知っているし、霊夢がこういうデリケートな話題に対してどういう感情を持っているのかも理解している。

後悔もしている。

先に立たぬ後悔を。

「正直、私から言えることとかはない。どう断つたらいいかとかなら相談にも乗るけど、どういう対応をするべきかなんて人に聞くことじゃないはずだぞ？」

「それはその通り……なんですがね。……私は今までそういうことに縁が一切なかったもので、何が正しいのかわからないんですよ。どうするのが正しい道なのか、私には分からない」

正しい道、というのならば、華扇にとっては天道がそれに当たるだろう。仙人らしい、と言えばそれはその通りなのだろうが、しかしこの場合のそれは、華扇に模範解答を示す道標にはならない。

むしろ、華扇が個人で導き出さなくてはいけないはずの回答を阻害する役割を果たしてしまっている。華扇自身にそういう認識はない。彼女に正しい道を示すはずの天道が、自身を阻害する要因になってしまっているだなんて欠片も考えていない。

宗教は人に道標を与えるが、それが必ずしも正しいとは限らない。

この場合、無宗教の魔理沙はそれを誰よりも把握していた。

巫女である霊夢とも早苗とも違う視点が自分にはあると、彼女は自覚していた。

魔理沙は右手の人差し指を立て、左右に揺らす。

「正しい道ねえ……。そんなもんがあれば誰も苦労しないだろ。そもそもさ、この場合の正しい道って何なんだ？」

「え？」

「お前が悩まないで済む道か？　男が悲しまないで済む道か？　霊夢や早苗の助言を生かせる道か？　自分に後悔のない道か？　神様が望んでる通りの道か？　全員が幸せになる道か？　誰も彼もが笑顔でいられる道か？　それは本当に正しい道なのか？」

「…………どういふこと？」

「仮に、正しい道なんていうものが今回の件にあるとしても、それを誰が決めるのかって言ったら、お前だろ？　最終決定権はお前にあるんだ。誰かに自分の選択を任せるのは逃げだぜ」



もしも、誰かが華扇に、貴女はこうすればいい、そうすれば皆幸せだと言って、それに華扇が納得したならば、おそらく彼女はその選択をすることに躊躇いはない。数ある選択肢の中から最善のものを選ぶのは、なるほど、確かに正しいのだろう。誰も不幸にならない、正しい選択なのだろう。

だがそれは、全員が納得のいくものなのだろうか。

平等な選択は、万人に受け入れられるものだろうか。

今回の件での選択は、最初が最後であり、そしてそれは後から覆すことなど出来はない。だからこそ、後悔をしない選択を華扇は選ぼうとした。禍根が残らない未来が模範解答だと考えた。

「真摯な回答では、ないよな。自分の意志も纏めて人に任せるんじや、仙人の名が泣くぜ？」

蕎麦を食べ終わった華扇は、勘定を払うと店から出る。

誰かに相談するという行為を魔理沙は咎めたわけではない。問題は、もしも返ってきた答えの中に華扇が納得のいくものがあつた場合、彼女はそれを選んでいた可能性があつたということだ。

だからこそ、二人の巫女は回答を濁した。

具体的な提案をせず、曖昧に終わらせた。

(魔理沙に言われるまで気付かなかったわね……。そんなに焦っていたのかしら、私は) 急いで仕事を仕損じる。まさにその言葉の通りだと言うべきか。余裕がなくなってきたことは事実だが、冷静に対応できていると思っていた。過信していた。

過剰な自信。

信じるべき自分は、果たして何処にいるのだろうか。

そして彼も何処にいるのだろうか。

「……どうも」

「……仙人、様? どうしてここに? え?」

「どうしてもなにも、返事をしに来たに決まっているでしょう?」

その言葉に、青年は身体を強張らせる。不自然なほどに目が泳ぎ、今にも倒れそうなほど急激に心拍数が上昇する。青年は、自分にとって耳触りのいい返事など始めから期待していない。ただ伝えるだけでも、伝えられただけでも幸せで、それ以上は望んでいなかった。

否定の返事も、肯定の返事だろうと、いらないとさえ思っていた。

まさか直々に自分のところにやってくるだなんて想像だにしていなかった。

なんだこれは、夢か。今日死ぬのか。

そう思ってしまう程度には彼は今、幸福の絶頂にいたが、それは誰が聞いたって酷く自分勝手な話だ。言うだけ言って言われた側の気持ちも考えずに、回答さえ望もうともせず逃げようとしていたのだから。

自分が他者に与える影響を一切考慮していない。典型的な自己中心的人間だった。

華扇はそんな青年の思考に気付かず、話を続ける。

「……先日、里を歩いていたら誰かが後ろから付いてくる気配がしました」

「え？」

「気のせいかとも思いましたが、その次の日も同じように視線を感じました。最初は里に入ってから暫くしてから感じていた視線が、里に入った瞬間から感じるようになっていくまでに時間はかかりませんでした」

「……………」

「貴方ですよね？」

「……………きづ、かれてたんですね」

よくもまあ、あんな雑な尾行がばれていないと思えていたものだ。その愚直さは凄

が、尊敬に値するような高尚なものではない。むしろ、あまりに人間らしい。行動に対して手段を選ばない。

それは、華扇が憧れているものでもあったが、しかしそれと同時に忌避し、手に入れる必要もないと思っっているものでもあった。欲しいという気持ちは必ずしも欲望とは一致しない。

近付きたくとも、なりたいとは思わないように。

超えたくとも、外れたいとは思わないように。

理想と至高は、全くの別物だ。

「……はい、俺です。最初の方は、偶然見かけたからちよつと後を追ってみようかなぐらの気持ちだったんですけど、徐々に、距離が長くなっていつてしまった。本当にすいませんでした」

「……いえ、私も気付いて放置していましたから。もつと早く貴方に向き合って、きちんと対処しておくべきでした」

ここで華扇が少し下手に出たのは、ここからの会話を円滑に進めるために、青年の罪悪感を少しでも取り除いておこうという打算からのものだった。悪いという気持ちから正直なことを話さなくなってしまうとは完全に本末転倒だ。

とはいえ、実際にそうすべきだったとは思っている。

「返事をする前に、いくつか質問させていただいてもよろしいですか？」

「……はい」

「えっと、ですね。これ、自分で聞くのは凄く恥ずかしいんですが、私のどこが好きなんですか？ こういう言い方はむしろ貴方に失礼かもしれないませんが、私は仙人で、基本的に修行の日々を送っています。好意を抱くような要素が、私にありますか？」

「……あー、えっと、ですね」

「はい」

「結構前なんですけど、里で、酔っ払っていた人を説教した時の事って、覚えてますか？」  
結構前。確かに、結構前の話だ。かなりの量の酒を飲んだらしい二人組の男が里で騒いでいたため、説教した記憶がある。とは言っても、酔いを醒ますためと言って、店の女将に水を掛けられてずぶ濡れだった男たちをただ放置するのが忍びなかったというのがあった。

ある程度諫めてやれば己の振る舞いを反省するだろうと考えての説教だったはずだ。

実際、その後あの二人が誰かに迷惑をかけているようなところを華扇は見えていない。「その時、俺もあの場にいたんです。……厳しく、でも優しく説教をする貴女を格好いと思つた。……そこから、まあ、なんて言うか、里でついつい、探してしまうようになつていつてしまったというか……」

言葉がぶつぶつと切れるが、それが恥ずかしさから来ているのだというのは顔を見れば分かった。

華扇が甘味屋の前に並んでいる椅子に座っている彼を見つけ、その隣に躊躇なく座った時だつて彼はあたふたして、少し距離を空けたのだ。今回は質問の方にデリカシーがなかったわけだが、早苗曰く、箱入り娘の華扇だ。大目に見てあげて欲しい。

「……そうでしたか。本分を果たしている私を格好いいと思つてくれたのなら、私にとつてそれ以上に嬉しいことはありません」

薄く笑みを浮かべながら、華扇は言う。

「こそこそ隠れる不審者ではなく、私のことを見て、格好いいと言つてくれた貴方となら、私は、友人になりたいと思います」

「……………」

「貴方の想いにはまだ応えられませんが、貴方の思いを、受け取ることは出来ます」

仙人と、人間。

それはどうしようもないくらい深く関わるものであると同時に、どうしようもないくらい絶対に交わることがないもの。

正しさの象徴と間違いの象徴。

それはどちらが正しくてどちらが間違っているのかなんて誰にも判断できない未開

の地だが。

彼の想いは、きつと間違いではなかった。

ならば、間違っているものは果たして何だったのか。

茨木華扇という人ならざる仙人がそれを思慮するのは、全てが終わった後の話だ。

## 4 安堵

お小言の多い仙人で有名な茨歌仙だが、彼女だつて四六時中誰彼構わずぶつくさと文句を垂れ流しているわけではもちろんない。巫女や魔女と雑談に興じたり、気になった問題の解決に動いてみたり、人里に美味しいものを探しに行ったりしている。

そして当然、仙人らしい修行もしていて、そのうちの一つに、瞑想がある。

しかもそれは、一般人が行うそれとは明らかに一線を画す。誰もいない、山に隠すように建っている茨歌仙の屋敷において行われるそれは、誰も邪魔が出来ない絶対的な究極の無心である。

集中すること、あるいは神を体感するものとしての瞑想が外の世界で広く知られている一方、華扇にとってそれはどこまでも戦いだ。寿命を延ばすという人間からかけ離れた意味合いと、仙人としての本分を全うし人に近付くという意味合いの、明確に矛盾した正当な修行。

彼女は、人に近付くために人から離れている。それは生き物ならば誰でも抱えている自己矛盾以外の何物でもないのだが、華扇自身にその自覚はない。人に近付いたが故に、別の方向に離れていってしまっていることに気付けという方が無理な話ではあるの



だが。

本来ならば、彼女のその行為を邪魔することは誰にもできない。屋敷に辿り着くためには山中の決められたルートを辿って行かねばならないからだ。

だが、そういったものを一切合切無視して、ここに來ることのできる者がいる。

「で、今日は何の用?」

「毎回毎回それだけ集中してんのによく気付くね。これでもできるだけ気配隠して、氣を遣つてきてるんだからそれを無下にしないでほしいもんだ」

「はあ……、貴女の口から氣を遣うなんていう言葉を聞く日が來るなんてね。ここ最近の私って、そんなに變なことになつてるかしら?」

「いや? 表面上は變わりないように見えるさ。流石は仙人様だねと褒めてもいい。だが、どうやら色々と變化があつたようだっていうのは感じ取れるし、そもそも知つてる」  
「知つてるのね……、まあ別に隠す氣もないけど」

死神である小野塚小町にとつて、正しい道とか、正しい順路とか、そういう煩わしいものは關係がない。そもそも障害としてすら認識していないと言つてもいい。

屋敷の屋根で瞑想をしていた華扇の背後から近寄つていたのだが、いつも通りあつさりと氣付かれてしまった。その流れに今更、驚きや新鮮味はない。

仙人と死神というのは本来、馴染むことなく対立しているはずの關係性なのだが、そ

もそも華扇は、仙人という形で人の道を外れる必要もなく、長い寿命をもっていた。幻想郷の他の仙人とは違う点が多い。

「で、最近里の人間と楽しげにしているそうじゃないか。こりや面白そ——もとい、一大事だと思つてこうやつてわざわざやつてきたつてわけさ。ほらほら、話を聞かせておくれよ」

「……今の貴女、やつてることが天狗とほぼ変わらないんだけど……」

「そうじゃないさ。あんな野次馬みたいなのと一緒にしないでくれ。あたいはただ心配してるんだよ」

「……………」

「今のあんたは、見てて酷く不安になる」

小町の耳にその話が入った時、彼女は話よりも自分の耳をまず疑った。それは通常ならば決してありえない事であり、同時にあつてはならない事でもあつたからだ。

あの仙人が、人里の人間と恋仲になつたなど。

困惑といった感情よりも、まずなによりも危機感と呼ぶべきものが一番強かつた。死神ながらにして仙人の身を、あるいは心を案じるなど前代未聞の話ではあつたが、たとえ一介の死神という立場からしても、それは放置しておいていい案件ではなかつた。

むしろ、死神の本分を全うするならば、それはいち早く解消しておかなくてはならな

い事案だった。

そこから詳しい情報を集めたところ、恋仲になったわけではなく、告白をされ、曖昧な状態で現状維持を図っているとのことだった。それは構わないのだ。死神に仙人の恋愛事情にずけずけと介入することが許されるような特権はそもそもない。

だから、不安は別のところにある。

小町は華扇の隣に座り込むと、空を見上げる。あるいは、月を見上げる。

「告白されたんだって？」

「……ええ、まあ。もう三週間ほど前になるわね」

「その件を色んな奴に相談したらしいね」

「そうね。三人に相談したわ。思いのほか、真面目に考えてくれた。一番真面目に考えてなかったのは、一番真面目に捉えてなかったのは、私なんじゃないかって思ってしまうくらいに」

「そうだろうさ。もともと仙人なんて子孫を残すことなんて考えてやしないもんだしねえ。恋人なんて今まで生きて一度でも考えたことがあったかい？」

「いえ、一度も。まあ、私には縁遠いものだとも思っていたというのもあるかもだけど」

小町が心配していたよりも、現状に対して華扇は何かを考えているわけでも、憂いているわけでもなさそうだった。それは良いことでもあったが、悪いように言えば、楽観

視しているということでもある。

自分の選んだ道が正解だということを魔理沙に言われてから、華扇は肩の荷が下りたような感覚を味わっていた。思った以上に現状に対して負担を感じていたと自覚すると同時に、きつとその負担はどの道に進んでも付きまといてくるものだということも理解していた。

一生を懸けて背負っていかなくてはならないものだろうと。

この辺りが早苗が華扇を箱入り娘と称した要因でもあるのだが、結局華扇の恋愛観は今をもって固いままだ。いや、それは恋愛観というよりは、死生観と言った方が近いものであるだろうか。

今よりも、先を考えてしまう。

それはもう、長寿を体現している者に架せられた呪いや戒めのようなものだ。

「——あたいはあんたが心配だ。どうしようもなく心配だ。立場的にはこの発言、結構不味いんだけど、言わなくちゃいけないんだろうなって思ったのさ。多分だけど、誰も、今現在のあんたについてはそこまで言及しなかっただろう?」

「……寿命差についての話ならば早苗としたけど」

「守矢神社の巫女か。ん、風祝か? あいつはどうなんだろうねえ。なんだかんだいつまでも生きてる気がするよ。それに、それじゃ話にならない。あいつは、経験していな

いから。体験をしていないから」

「……………」

「あたい達にとつて、人間が死ぬっていうのは当たり前のことだ。日常的なことだ。長期的にでも短期的にでも人なんて簡単に死んですぐに死ぬ。それはもうどうしようもないくらいに種としての差があるからだ。絶対に埋められない歴然とした、格差が」

「……三人とも、人間だから。しないでしょ、そんな話。真剣に考えたって、百年もすれば全部なかったことになるなんて、言うまでもないんだから」

霊夢も、早苗も、魔理沙も。

華扇に対してした助言は、実際は似通っている。自分の意志で考えて、自分の行動で示して、自分の正しいと思つた道を進め。それは投げやりな助言ではなく、華扇自身がそういつた行いに不慣れだったために言わざるを得なかつた抽象的な助言だ。

だがそれと同時に、不老不死の象徴である仙人が、ただの人間と真つ当な恋など出来はるはずがないというのも、全員が分かっていた。だがそれでも、三人は逃げなかつた。

ここにいる人間の痕跡など、百年もすれば完全に消える。

そしてその百年は、彼女たちにとつてそう長い時ではない。

今まで体験したことがないことで悩み、それを誰かに弱々しく相談し、いくつかの助言をもらつて、それを元に自分の行動を決定して悩みが解消されたとしても、そういつ

たあれこれも百年経てば全てが失せる。

風の前の塵に同じだ。

それは、あまりにも悲しいこと。

覆しようのない、一方通行。

「人間と妖怪の恋愛話なんて別に珍しいものじゃない。でも、それが幸せな終わりを迎えるのは聞いたことがないよ。大抵は悲恋で終わる。人間側にしても、妖怪側にしても」

「……そりやそうでしょうね。種族の差は埋めようと思つて埋められるものじゃない」

「あんたは返事をしてから、それを考えないようにしているんじゃないの？ 先よりも今を必死で見ようとして、視野が異様に狭くなつてしまつてゐる。そんな状態に陥るよいうな道が、あんたにとつて正解だつたと言えるのかい？」

「正解を決めるのは私よ。間違つたとは、あれから一度だつて思つたことはないわ」

「その考えだつて結局、あんたのものなのかい？ 誰かに言われたことに納得して同調するのは構わないと思うけど、ただ乗つかるだけつてのは頂けないねえ。助言は答えにはなり得ない。助言つていうのは道標でしかなくて、決して到達点ではないんだから」

「……………わかつてるわよ」

華扇は、その右手でもつて怨霊を度々握り潰す。怨霊というのは、恨みを持ったまま

の死霊や生霊であり、地上に留まってはいるもののそれは紛れもなく、魂なのだ。

彷徨う幽霊を退治すると言えば、確かに聞こえはいい。正しいことをやっているように聞こえるだろう。だが、魂である以上それは輪廻転生の中に組み込まれた、歴とした世界の一部だ。個人の裁量で勝手に行っていいことではない。

それは、人間の魂を軽視しているとすら言える行為なのだから。

握り潰してしまえば、それはもう輪廻のサイクルには戻れない。ただその場で消滅し、雲散霧消する。その行為は、仙人として正しいのだろうか。果たして、魂ではなくとも、関わった人間にも同じような対応はしないと、断言が出来るだろうか。

「あたいは忠告した。ここからあなたがどうなるかが、あるいはどうしようが、そこはもうあなたの選んだ正解ってやつだ。きっとあたいにそれを否定する権利はないだろう。でもね」

小町はそこで一回言葉を切った。

「——あなたの行いは、あんた自身が考えれば考えたほど、あんたにも否定できなくなる」

「……………」

「自縄自縛——ってほどでもないけど、後悔しても構わないって言えるような選択なんて、実際この世にないからねえ……」

後悔してから、気付くのだ。  
なんだって、いつだって。

「ま、死神から仙人への、助言、って言うか、お節介だね。忘れておくれよ」

立ち上がった小町はいつの間にか消えた。瞬間移動とかの類ではないだろうとは思いつつ、華扇は誰もいなくなった屋根に一人だ。月に雲がかかる。雲の多い夜だ。暗闇の中、華扇は自分に呟いた。

「……わかつてる。わかつてるわよ。言われなくなつて」

仙人の夜は、余りにも暗く、余りにも長い。

勇敢にも、あるいは無謀にも、山の仙人である茨歌仙に告白した青年の名は深場宵人という。何の変哲もないただの人間だ。普通に生まれ、普通に育ち、普通に頑張り、普通に手を抜き、普通に恋をして、普通に告白をするような、余りにも普通で不釣り合いな人間。

彼に唯一、普通でない部分があつたとするなら、人ならざる少女に気持ち伝えるような蛮勇を備えていたという点だろう。大方の人間が尻込みし、諦めることを、彼は実



行した。

そしてそれは小さな芽を出した。

足元にあることさえ気が付かないほどの小さな芽を。

ただ、蛮勇によつてのそれは蛮行ではない。少なくとも、二人は現状を楽しんではいたのだから。

「この辺ですね。この辺りが割と涼しいんですよ。やつぱり緑が多いからなんでしょうけど、この季節でも快適なのは凄いですよね。自然の力を感じるつてもんです」

「涼しいのは同意ですけど、普段からこんなところに来ているんですか？　あまり森に近づきすぎると危ないですよ」

「大丈夫ですよ、魔法の森ならまだしも、ここは割と人里から近い位置にありますし。皆も結構ここまで山菜やらなんやら取りに来てたりしてますから」

「まあ確かに、近辺にそういった気配はありませんが……」

華扇と宵人は、人里から見える位置にあるほどの森、そこから少し外れた開けた場所に来ていた。木々の間をすり抜けた風が流れ込むような地形になっているのか、どこからともなく風が吹いている。

九月中頃の現在、終わりがけの残暑であつても厳しい季節にこの涼しさは確かに自然の恩恵だろう。

このぐらいの涼しさならば、霊夢でもやる気を出すかもしれない。

ただ、魔法の森からは程遠い位置にあるとは言っても、森は基本的に人間の領分ではない。獣と妖怪の住む場所であり、人が踏み込み過ぎればそれは危険でしかない。

経験したことがない者にとっては、危険は認識し難いものであるのも確かだが。

「ただ、不自然って言えば不自然なんですよね」

「不自然？ この場所がですか？」

「いえ、この場所がって言うか、この森が。妖怪って、っていうのもあれですけど、結構森に潜んでるやつ多いじゃないですか」

「そりゃあ、森は妖怪にとっては自然の恩恵を最大限に受けられる場所の一つですからね」

「目撃例がないんですよ。一回たりとも。この森で妖怪を見たとか、妖怪に襲われそうになったとか、そういう話が一つもないんです」

「え？ ……誰も襲われていないか、あるいは、襲われてはいるけれど誰一人として生還していないか、ということになりますか……、さすがにそれは……」

「ええ。ありえないと思うんですけど、それと同じくらい、森に住む妖怪を一度も見ないのだからあり得ないとも思うんですよ。森に妖怪がいないっていうのは、もうそれは森としての本分を果たせていないって言ってしまったもいいわけですし」

妖怪は自然の一部だ。自然現象に何とか理由を付けようと、獣や魔の形をモチーフにした化物という形を人間に与えられた妖怪は、厳密に言えば生物というより現象に近い。人の形をした自然現象。

それが自然の一部である森にいない——幻想郷の森にいない。これは明らかな異常事態だ。

だからこそ、まともな戦力を有しているわけでもない一般の青年が、たった一人でそれなりに深いこんな所まで入って来れてしまっている。異変とまでは言えないが、何も起きていないということは絶対にならない。

「ただ、動物は多いって話です。何故かはわかりませんが、近くに寄っては来るけど襲つても来ないし、捕まえられる距離にも入らないとかで」

「何かしらの経験から学習したのか、あるいは警戒しているのか……。まあそもそも、自然で暮らす動物はあまり人間には近付かないものですが」

「そこで！　そこでですよ仙人様！」

「はい？　どうかしましたか？」

「動物を手懐けるのに長けていると噂の仙人様ならば、森の動物と会話して森で何が起きているかを探ることもできるのではないかと思ひまして」

確かに華扇は屋敷に動物を多数飼っている。通常人間には聞くことのできない動物

の声を聞き取り、成し得ないはずの共存を実現させている。

これは何度でも言うが、彼女は人間に近付こうとした結果、人間から離れてしまっている。本人がそれに気付いているのか、あるいは気付いていないのかはまた別の話だが、彼女自身はその点を改める気はない。

そもそも、それでいいという風に考えているのかもしれないが。

何はともあれ、動物関連の異常を解決するのに華扇を頼むというのは非常に正しい選択ではある。華扇本人としては、その噂はどこから流れているのだろうかとは思うものの。

「なるほど、ここに来たのはそれが目的だったんですか？」

「半分半分ですね。なんか今年、去年とかと比べて暑いので、お勧めのこの場所に来たかったっていうのは本当です。ただ、それと同じくらい、嫌な感じもしたので……」

「悪い噂が一つもない場所ほど怪しい、といった感じですか。……確かにこの森、静かすぎますね」

もし妖怪に関しての調査というのならば、自分よりも適任だと思える者を華扇は一名知っているが、動物と妖怪の両方を扱うならば、自分が適任だとは思えた。その両方に對し適度な知識を備えているのは、一部の例外を除いて自分だけだろうという自負があった。

そしてこの森。

気付くのが遅れたとさえ思う。本来ならばここに来るまでの道中で察知できてもおかしくはなかったはずだ。静かすぎるのだ。動物が息づいているような気配が全く感じられない。

宵人が言った、動物は多いという言葉。それを明確に否定するだけの材料が、すでに華扇の中には揃いつつあった。こんなに不気味な森があるのか。これはもはや、異変と言つても間違いではない――。

「……大丈夫ですか？」

「……はい」

この森に関して、今この場で宵人に言ってしまった方がいいものだろうか。いや、そもそもここままで大きな変化に本当に誰も気付いていないのか。八雲紫なんかは気付いても実害がもたらされるまでは放置しそうではあるが。ここまでの明瞭な事態に誰も危機感を覚えていないというのは、それ自体がもう恐ろしいことだ。

確かにこれなら、人里の人間が妖怪を見たことがないといった理由も、動物を頻繁に見る理由にも説明は付く。

だがもし、今華扇が考えている可能性が真実だとするならば、紛れもなくそれには第三者の意図が関わっている。そしてこれは、幻想郷に起こっている、新しい異変だ。

森を見つめて考え込む華扇を心配そうに見つめる宵人。もしかして本当になにか大層なことが起こっているのだろうか。そんな風に考える。半分半分とは言ったものの、実際の割合としては九対一くらいだ。言うまでもなく、仙人様と出かけたという気持ちだ。

そして、好奇心が一。

好奇心旺盛な青年だった。だからこそ彼は、里で見かけた華扇に一目惚れしたのだ。しかし、嘘を吐いた。

羞恥心過多な青年だった。だからこそ彼は、仙人様に恋をした本当の理由を偽った。

「……………」

好奇心は猫を殺す、という、異国の諺がある。彼は勿論そんなもの知らないし、この先で知る機会もきつと無い。だが、それは確かに、彼をしつかりと表してしまっていた。

振り向いた先、華扇の後方にある茂み。

そこから、眼光と殺意を放ち、狙いを定める妖怪の姿を彼は見た。

何かを考えていたわけではない。考えるまでもないことだったただけだ。咄嗟に華扇を突き飛ばした彼の、左胸に穴が開いた。呆然とした表情の華扇は、確かにその鮮血と、笑顔の彼を見た。

## 5 離別

空中に多量の血液が浮いているかの如く、時間が止まっているようにすら感じた華扇はほぼ反射的に、目の前の茂みから感じた妖力目掛けて右手を放つ。それがなにかを確認することもなかった。生物らしい脈動を、動物らしい毛触りを右手として扱っているその表面に感じはしたが、それは容赦する理由としてはあまりにも足りなかった。

具体的な正体を確認することもなく、華扇は右手のそれを呆気なく簡単に握りつぶした。流れ出る血液の温かさも、肉の柔らかさもほとんどなかったことから、妖怪の成り損ねだと判断する。妖力の残滓が手の隙間から漏れ出て、何も握っていない右手を象つた包帯が宙に浮く。

それと同時に、倒れる音がした。

右手を元の形に戻した華扇はすぐさま宵人の傍に駆け寄る。自分を、仙人を庇って負傷した稀有なる人間の傍に。宵人の胸部から血が流れている。止めどなく、ドロドロと流れている。地面に染み込んでいく。顔がどんどん青ざめていく。少し照れるたびに赤くなっていた顔が、青白くなつて――。

「……………っ！ 少し動かしますよー！」

華扇は男を抱き上げる。ここから永遠亭まではどのくらいかかる。ここまでの深手を負つては里での治療では間違いなく足りない。今から急げばきつと間に合うはずだ。宵人を助けることが出来る。

抱き上げた際、宵人が小さく呻き声を上げる。気にしては運ぶことなど出来ないが、苦しめているということ、自分のせいだという罪悪感が華扇を苛む。同時に、本当に間に合うのかという不安、焦燥が止めどなくこみ上げてくる。

飛べれば早いだろうが迷いの竹林を抜けられるという自信がなかった。確実に辿りつきたいならばあの道案内を探さなくてはならない。走り始めようとした時、宵人が口を開いた。口の端からは血が伝っていた。

「……仙人様、ご無事、ですか……？ ……ははは、無事、ですよね……。きつと……当たつても、無事でした、よね……？ ……出過ぎた真似、でしたかね……」

「……私は、無事です。傷一つない。貴方のお陰です」

「はは……、有難い、お言葉だ……。勿体ない……。こんな俺でも、役に立てたん、ですね……」

華扇はゆつくりと歩き始める。なるべく、普段からは想像もつかないような弱々しい宵人を揺らさないように。彼の視線はどこか虚ろだ。華扇に褒められて笑顔を浮かべたはずなのに、薄く開かれたその眼に、華扇は何も見ることが出来なかった。



もう彼の眼には、茨歌仙しか映っていない。

いや、それは今に始まったことではなく、最初からきつとそうだったのだ。初めから、彼はどこまでも盲目的で、そして愚直だった。その眼に、遠く離れた仙人しか映らぬほどに。

遠く離れた仙人を、何処か近くに感じてしまうほどに。

病だと、思っていた。

一時的な、病のようなものと。

今は熱くなっているが、ある程度すれば熱も下がるだろうと思っていた。華扇が宵人のことを、多少なりとも軽く見ていたことは否定できない。何かしらの危機に遭遇すれば、きつと自分を置いてさっさと逃げるだろうと、軽んじていた。むしろ、そのほうがありがたいという気持ちもあった。いつその事、そうなってくれればと。

だから、こんな事態は予測していなかった。

こんな、取り返しのつかないことになるなんて。

「……本当は、俺がこうやって、仙人様を抱き上げてみたかったですけど……、まさか、される側になるとは……。……人生なんて、上手くいかない事ばかりだ……。そう……。思いませんか？」

「……そうですね。取り返しのつかない事態に陥って、それから後悔する。人間なんて、

そんなのばかりです」

なにを偉そうに語っているんだ。今まさに、その取り返しのつかない事態に直面し、そして後悔している分際で。人間でもなくせに、何を一人前に語っているんだ。

「……………」

何の為に仙人になったのかと、問うたことがある。

彼女はこう答えた、人を越えたかったからだ。

同意を求められ、しかし華扇は否定した。

華扇は言った、人に近付きたかったからだ。

確かに、人里に近い存在にはなっただろう。以前よりは人に近付けたという自負もある。

だが。

人の想いを軽んじておいて、果たして何処が人に近付けたなどと宣おうと言うのか。「あ……………あ。残念だなあ。折角……………、仙人様に抱えてもらったっていうのに……………、誰にも自慢できないなんて……………」

「自慢は、できれば控えて頂けるとありがたいですね。なんだか貴方は、物事を誇張して話しそうな気配がします。あつたことを語るだけというのなら、別に構いませんが」

「……………やっぱり、仙人様は何でもお見通し、ですネ……………」

分かっている。華扇も宵人も、理解したうえで話をはぐらかしているのだ。なるべく空気を深刻な方向へ進ませないように。華扇は言葉を選んでいるし、宵人もそれを無下にしないようにしている。

自分の態度が宵人に新たな負担を与えているのは分かっている。だが、その発言はしてはいけない。

宵人より先に、華扇の膝が折れてしまう。

彼に、生を諦めさせてはいけない。

「……仙人様、以前、どうして好きになったのかって……、聞きましたよね？」  
「……はい」

「あの時俺、説教をしてる姿が格好良かったからだって、言いましたけど……、それが一番の理由じゃないんです……」

浅い呼吸を繰り返しながら、宵人は口を開く。今言わなければ絶対に後悔することになると思ったから。だからもう、華扇がいくら気を遣おうと無駄だ。宵人は既に、生から手を離れた。

これは、きつと呪いだ。

少しでも長い間、自分を記憶に刻み付ける呪い。

彼にその自覚はなくとも——いや、むしろ呪縛は、本人に自覚がない方が効くのだ。

その方が、より後に残る。より尾を引く。深く、傷は残る。

「いつだったかなあ……、仙人様が甘味処で団子食べて、お茶飲んでるときに……、貴女を見かけた……。一目惚れだった……。あの感覚は、今でもしつかり覚えてる……。笑顔が……、眩しかった……」

尊ぶように、遠くを見つめながら、神々しいものを語るかのように。

笑顔を浮かべて、彼は言う。

「本当に、ただ、それだけだった……。それがなんでか……。あの笑顔の隣にいたい、一番近い所で見ていたい……。なんて、そんな傲慢なことを思ってしまった……。絶対に無理だって、わかってて……。わかってても——乞わずにはいられなかった……」

苦しいはずだ。今だって止まることなく血は流れ続けていて、伝わってくる体温は少しずつ、だが確実に低下していつている。本来ならば口だって開けまい。なのに、彼は笑顔を崩さない。

そうさせているのは自分だ。自分が、宵人の言葉を制限している。

痛いとか、死にたくないとか、涙を流してそう叫んだって誰も咎めやしない。当然の権利だ。人間には、本音を叫ぶ権利がある。その権利を、彼は捨てている。

惚れた女性の前で、最後まで格好つけて、精一杯潔く死のうとしている。

涙の一滴も流さず。綺麗に、本懐を遂げようとしている。

「……笑顔が似合う顔、なんですすよね、多分……。……この一か月、楽しかった、なあ……」

死んでいくのが分かる。両手を通じて伝わってくる。

自分は、何を言えればいいのだ。何を言うのが正解だ。自分が選んだ言葉が正解か。彼が喜ぶ言葉が正解か。嘘を吐くのが正解か。本音を言うのが正解か。正解なんてあるのか。

口元から、血が一筋——目元から、涙が一筋。

華扇の膝が折れた。地面に膝を付いてしまう。口から漏れたのは、考えてもいかなかった言葉。だが、いつかきつと自分は、誰にだつてこの言葉を言うのだろうと心のどこかで知っていたはずの言葉。

「——ごめんなさい」

誰へ向けての謝罪なのだろう。それすらもわからない曖昧な言葉は、果たして彼の耳に届いたのか。ほぼ同時に、腕が垂れる。全身から力が失われる。真つ当な別れの言葉も言わないまま、それは終わった。

初めから終わることが決められていた予定調和。真つ当に別れることなんてできな

いと知っていた関係の当たり前の結末。

自分の選択——これが正しいわけがない。

だって、ほら。

腕の中で死んでいる友人の死に、涙の一滴だって、出やしないのだ。

墓。死んだ生物を弔うための場所。その上に乗る墓石は、その墓が誰のものなのかを分かり易くする標。今、茨木華扇の目の前にある墓は、つい先日、彼女の腕の中で死んだ男の眠る墓であり、できることならば直視したくない類のものだった。当然、そんなわけにいかないというのを華扇は自覚していたし、こうして直視することこそが自分の責任だとも思っていた。本来ならば、彼はまだ墓石の下に埋められることなく、元気に生きていたはずなのだ。自分さえいなければ。

「……こうして来てみたものの、特別話すこともありませんね。……まあ、ここぞでなにかを話したところで独り言にしかありませんが」

ただ黙って墓を見つめることに耐えられなかつたのか、華扇は口を開く。結局は今の言葉だって独り言だが、目の前に墓がある以上、それは独り言ではなく語りかけなのだ

ろう。墓に話しかけることを、誰が馬鹿にできようか。とは言っても、返事が帰ってこないのは間違いない。墓は喋らない。これは墓の下に眠っている者の代替品にすらならない、ただの無機物なのだから。

「……あの日から、後悔し続けています。私がどれか一つでも、どれだけ小さくとも、どこかの行動を変えていれば、こんなことにならなかつたんじゃないかと」

霊夢から、あんたのせいじゃないと言われようと、早苗から、あまり気に病まない方がいいと言われても、魔理沙から、相談があれば聞かざと言われても、気にするなという方が無理だ。それはおそらく三人だつて分かつていて、それを踏まえた上で優しい言葉をかけてくれたのだろう。そしてそれと同時に、そんな慰めの言葉になんの意味も無いことだつてわかつていたのだろう。結局、罪悪感というものは自分自身が納得できない理不尽から生じるものであり、他人の言葉で簡単に消し去れるものではない。理不尽の、一つ一つ。

「……でも、忘れるんですよね。私はまだまだ死ななくて、そして、いつの間にかあなたのことを忘れるんですよね」

茨木華扇は仙人だ。修行を重ね、死神を追い返すことで現実的でない長寿を実現している。もう何年生きたかも覚えていない。自分は今まで数多くの死に立ち会ってきたはずだ。動物の死に、妖怪の死に、それに、人間の死に。今の自分の記憶に残っている

のはその内のいくつだろう。全部覚えていけると言いたい。でもそれは無理だ。覚えていないから。半分？ 半分の半分？ 半分の半分の半分？ 今日の間、たった一人の人間の墓石の前でこんな後悔していることだって、何十年後、何百年後かには忘れてしまふ。跡形もなく、忘れ去る。

「……ふ、ふふ。今感じているこの罪悪感も、そのうちに忘れてしまふんでしょね……」

最初の寿命差による危惧は、ひよつとしたら華扇の過去の経験に基づいたものだったのかもしれない。それすらも覚えていないというのだから、とんだお笑い草だ。笑い話にもなりはしない。あまりに滑稽すぎる、身の程を弁えなかった妖怪の末路だ。自業自得という言葉が、あまりにもよく似合う。失敗には、取り返せる失敗と取り返せない失敗があつて、華扇は今まで騙し騙しそれを見過ごしてやってきた。時には見過ごされもした。見逃された。極論、今自分が生きてることだって、誰かから見逃された結果に過ぎない。どれほどの罵声を浴びせられても、どれだけの非難を受けても、弁明のしようもないほどに放置してきた失敗の積み重ね。

「……正直、あの時、貴方が死んだ時、私、安心しちゃったんですよ。もういいんだって。応えられない関係が続ける必要ないんだって、思ってしまった」

謝つたつて償えない。頭を垂れても許されない。泣いたつて拭えない。あれも正解



だったのだろうか。自分で考えたことだから正解だったのかもしれない。正解は必ずしも正しいものではない。自分にとつての正解は自分が納得できるものだとはい限らない。酷く矛盾したことを考えている自覚はある。許してもらおうなんて思っていない。許されなくたっていい。正しいことは美しいことではないし、間違っていることは醜いことではない。きっと彼はそれを知っていた。知っていたから、正しくないと分かっている、自分の信じる正解を選ぶことが出来たのだ。

「——羨ましい。………人に近付くなんて、無理なんでしょうかね、結局」

華扇は、ずっと俯いている。その眼は墓石を見ない。そこに刻まれた名前を見ない。いつか忘れるのなら覚えている必要はない。涙も流せない自分が、その名を覚えている資格はない。身を翻し、その場から去る。不意に、声が聞こえた気がした。

「さようなら——私を好いてくれた人」

気のせいだと分かっていた華扇は、振り返らなかつた。

あの時、あの場所で、振り返ってさえないければ。

彼に対する罪悪感か、己の内の後悔の念か。

自分にそう思わせるのがどちらか、華扇には分からなかつた。

その悩みは、まるで人間のようだった。

## 交流、そして空け 『アリス・マーガトロイド』

## 1 人形

七色の魔法使い。

魔法の森に住む魔法使いにして人形師、アリス・マーガトロイド。

魔法使いは基本的に他者との接触を好まない。本来魔法使いと言うのはそういうものではあるが、魔法使いとなつて日が浅いため、アリスはかなり頻繁に人里を訪れている。

食事をしたり、睡眠を取ったり、人間としての慣習からまだ脱却できていない。

彼女が何をしたいのか。彼女は何をしたくて魔法使いになつたのか。

人間に友好的でありながら、自らの人間を捨て去つたのならば、そこには必ず理由があるはずなのだ。

里の人間曰く、人形の様に美しく。

里の人間曰く、人形よりも端麗で。

里の人間曰く、人形が如く——冷淡である。

見る者によって印象が変わるのが彼女である。その根底にあるのは、どこか浮世離れ

したような彼女自身の雰囲気であり、周囲を寄せ付けないかのように放たれる高貴さだ。

では逆に、彼女の要素はそこだけなのか。

これは、彼女が自分を知る話。

知って、失望して終わるだけの話である。

ある日の昼過ぎ、一人の男が人里を歩いていった。何かしらの目的があつたわけではない。なんとなく暇だから散歩をしよう程度でしかなかった。別にそれは今日に限ったことというわけではなく、昨日も一昨日も同じであり、そしてきつと明日も明後日も同様に暇なのだろうと男は理解していた。ある意味では自業自得なのだろう——という思いがあり、現状を打破しようという気概もない。

端的に言つてしまつて、彼は退屈だつた。

しかしだからと言つて、それを見つけたとき、彼は特に運が良いとは思わなかつた。むしろただひたすらに疑問だつた。

里の中の薄暗い路地。

そこに倒れるように落ちていた、美麗な人形を見つけても。

「……………これって、人形劇の人形……………か？」

精巧に作られた人形を丁寧に拾い上げ、男はそう呟いた。見覚えのある人形だったのだ。というより、里に住む人間ならば、おそらくはほぼ全員がこの人形を見たことがあるはずだ。里に時折、人形劇を披露しに来ている、美しい金髪に輝く瞳持つ彼女が使用している人形。これはそれで間違いないだろう。と言うか間違えようがない。

名前は、確か、なんだっただろうか。

「……………届けた方がいいのかな」

次に人形使いが里に来た時にでも渡せばいいのだろうか、じゃあその時までこの人形をどうするのかという話である。この人形を家に置いておくのは少し——かなり気が引ける。変な話だが、この人形を家に置いたらこっちが委縮しそうだ。上手く言えないが、そういう不思議がこの人形にはある。ある種の威圧感と呼んでもいいかもしれない。

可及的速やかに持ち主の元まで届けたいのはやまやまだが、あの人形師がどこに住んでいるかを男は知らなかった。里の人間に片っ端から聞けば誰かしらが知っているかもしれないが、この人形を持ちながら里内を歩くのは危険だと思っただし、しかしだからといってここに一先ず置いていくというのは選択肢としてありえないだろうとも思う。

こんな薄暗い所に置いてあるから誰の目にもつかないのであって、例えば、表に出しておくというのはどうだろうか。そうすれば流石に人目を引くはずだ——とは思ったが、なんだかそれだと、自分の後に拾った誰かに責任を擦り付けようとしているみたいで気が咎める感じはある。

首を傾げながら考えるが、打開策、解決策と呼べそうなものが思い浮かばない。

と、不意に、手の中の人形が動いた。

「うおっ！」

驚いてしまった男は反射的に手を放してしまった。落とすと思った。覚悟した。しかし、手放したその人形は重力に従うことなく空中で静止した。瞬きを幾度となく繰り返してしまいが、いつまで経っても人形が落下する気配はない。まあ、落ちなかったのならば、疑問はあれど文句はない。再び持つために手を伸ばした——が、人形はその手から逃れるように勝手に移動し始めた。

人形とは単体で移動できるようなものだっただろうか、いや、そんなことを言っている場合ではない。どこへ行くかは知らない。ひよつとしたら持ち主であるはずの人形の元へと帰って行ったのかもしれない。だが、そうではなかった場合が怖い。

もし全く見当違いの方向に人形が行ってしまったら、そのまま永遠に行方不明のままという可能性も十分にありうる。あの美しい人形がどことも知れない場所で朽ち果て

るというのはどうにも忍びない。

「……………はあ」

男は空気を思い切り吸い込むと、徐々に小さくなり、速さを増している人形を追いかけるため、地面を蹴った。

## 2 約束

「どいだい……」

迷った。間違はなく迷った。これを迷ったと言わずして何を迷ったと呼ぼうか。

最初の内は良かった。それなりに見覚えのある道を走って来れていたし、人形を見失うことは無いだろうと思えていた。問題は人形を追いかけて森に入ってからだ。薄暗いわ、草のせいでまともに走れないわ、人形は飛んでいるからどんどん先に行ってしまうわで散々だ。

もしかしてあの人形は単に自分から逃げたのではないかと思ってしまうほどだ。

「……もしかして俺、余計なことしちゃってた感じなのかな？」

彼から逃げたいたのであれば、後ろから追いかけてくる男は人形の目からでもさぞ気味悪く映ただろうなと思いつつ、彼は当に見失った人形の影を探す。あの人形師の元に人形を届けなければという思いは変わっていないし、そして何より彼はもう迷っているのだ。闇雲に歩き回るよりは、人形の後を追った方が生存の可能性が少しは上がるだろう。とは言え、死んでもいいか。そういう思いはある。

里に帰らなくて済むのならば、それもあってもいいかもしれない。



「確かこつちに行つた気がするんだけど……」

茂みをかき分けながら必死に前へと進む。足首の辺りに草が当たつてさつきから地味に痛い。ひよつとしたら傷になつていゝのかもかもしれないが、確かめる余裕はない。完全に人形の姿が見えなくなつてから数分経つが、もしかしてもうあの人形師の元に自力で戻つたのだろうか。そうだったならそれで別にいい。むしろ願つたり叶つたりだ。ただ、あの金髪の美しい少女が、こんな暗い森にいる理由がどうにも分からない。見当もつかない。だが、いないのだったら人形がこつちに飛んできた意味が分からないし。

「……………ふう、ん？ え？ 家？」

つらつら考えながらさらに進んでいると、今まで歩いていた暗い森にしては明るく開けた場所に出て、そこには家があつた。人里に建つていゝような家ではなく、西洋風の家屋。お洒落とはこういう建築物のことを表す言葉なのだろう。周囲の自然を乱すようなことなく、絶妙な自然体でその家はそこにあつた。

「おお……………ん？ あ」

そしてその家の前には、まるで糸が切れてしまつたかのように地面に人形が倒れていゝた。男は慌てて駆け寄り、人形を拾ひあげる。服が破れていたり、汚れてしまつていゝいかを確認すると、安堵の溜め息を吐いた。ここまで来たら疑う理由も無いだろう。この家はあの人形師の家だ。だからこそここの人形は自動的にここまで帰つてきたのだろ

うし。理屈こそいまだ不明だが。これでもし違つたらなんなんだと叫んでしまふだろうことは間違いない。

「汚れない位置に置いて、人形師に見つからないうちに帰るか……、あゝ、でも帰り道分かんないな……、まあいいか……」

この、まあいいかは、どうにかなるだろ的な意味合いの前向きな言葉などではなく、別にどうなつてもいいという完全に投げやりな意味での言葉だった。先ほども似たようなことを考えてはいたが、さつきまでとは心の軽さが違う。人形を見失つたという心残りがもうないので、なんだつたらさつきよりも直接的に、死んでやろうとすら思つていたかもしれない。唯一の心残りとして挙げるならば、あの人形が再度勝手に動き出さないかという心配くらいだ。そして再び、森に足を踏み入れようとした時。

「ちよつと、その貴方。こんな所に何の御用かしら？」

今から帰ろう、もしくは死のうと思つていた男が聞いたその声は、里で何度か聞いたことのある声だった。森の方に向いていた顔を声が聞こえた方へと向けると、そこには声の通り、あの人形師がいた。音が来たのとは反対方向の森から出てきたように思つたが、草の音はしなかつた。飛んでいたのだろうか。まあなんいせよ、問われたのならば答えなければなるまい。

「えつと、その玄関前においてある人形を届けに——いや違うな。これ嘘になるな。

……届けようとしたらひとりで飛んでいったその人形を追いかけたらここに着いた……ですかね？ 別に悪戯とかをしに来たわけではないです」

「人形？ ……これ、どこにあったの？」

「里の裏道に置いて……いや、落ちて？ たんですけど、人形師さんが落としたんじゃないんですか？」

ありえないと思つた上での問いではあつたが、返事は無かつた。その時すでに、人形師は何かを考え込んでしまつていたからだ。別に返答を期待してはいたわけではないのでそれは構わないが、少し待つても動く気配がまるでない。

もう振りきつて森に突つ込んでしまおうかと冗談半分で考え始めたところで、玄関先に置いてあつた人形が、ひとりでに人形師の伸ばされた手元へと向かつていく。驚いて人形師の方を見ると、彼女は右手の指を器用にばらばらに動かしていた。人形にその手は向けられていたので、糸で手繰り寄せたのかとも思つたが、そうなるというの間に糸を付けたのがまるで分らない。

「……汚れは無いわね。少なくとも乱暴に扱われてはいない……、何かに使われたわけでもない……、だとしたらなんで里にこの子が……？」

「……あのー、すいません。えっと、俺、帰つてもいいですかね？」

考え込んでいる様子も、人形を手を持つている様も絵になつていたけれど、いつまで

もその様子を見ているわけにも行かない。死ぬにしても、運良く里に辿り着くにしても、早いに越したことは無いだろう。もう自分に用は無いだろうと思つての発言だったのだが、逃げようとしているだけでも思われたのかもしれない。少し厳しめの口調で言葉を掛けられる。

「待つて。もう少し詳しく話を聞かせてもらいたいのだけれど」

「詳しく……、つて言つても、さつき話したことで概ね全部ですよ？ 落ちてて、飛んでいつて、追いかけてきて、今ここにいて。それ以上の事情つてなると、もうその人形に聞くくらいしか術はないかと……」

彼がそう言つても人形師に納得する様子はない。確かに彼自身も、話していてなんて信憑性のない話なんだろうと思つているほどだ。納得しないその様子にこそ納得してしまいそうだが、自分はもうこれ以上の情報を持つていない。いくら疑わしかろうが、無理やりにも納得してもらうしかない。

「……はあ、まあいいわ。今度里に行つた時、何処にこの子がいたかを詳しく教えてもらえるかしら？」

「え？ そのくらいなら全然構いませんが……、あ、すみません、一つ聞かせて頂いてもいいですか？」

「……なにかしら？」

「里って、どっちの方向ですかね？」

死んでやろうとすら思っていた男ではあったが、人形師に今度里に来た時に人形の落ちていた場所を教えるという約束をしてしまった以上、少なくとも今日死ぬことは出来なくなってしまうたわけだ。となるとこの目の前の森から生きて出る必要があるわけで、しかし道もわからない男にそれは無理な話だった。つまり人形師に道を尋ねるのもやむを得ない行為だった。

「いや、本当に申し訳ありません。道案内させてしまうことになるとは思ってなくて……」

「何度も謝らなくていいわ。それにそもそも迷いやすい森ではあるのよ。だから気が咎めるというのであれば……そうね、あの子を見つけてくれたことへのお礼、とでも思つて」

まさか森を出るまでの道案内をしてくれるとは思わなかった。なんとなく漠然とした方向さえ教えてもらえればその方向に真っ直ぐ進んでいくつもりだっただが、どうも人形師が言うには真っ直ぐ進めない森なのだそうだ。こんな奥まで入り込んだことな

どなかったのでもそんなこと知らなかったのだが、逆に、死ぬのにはもってこいの場所とも言えた。

「……あの、この森にはどのくらい住んでるんですか？」

「……………どのくらいかしら。もう数十年になるのは間違いないと思うけど」

まだ少女と言えるその容貌から数十年という言葉が飛び出したことに多少ぎよつとするが、まあそういう人もいるかと思った。良くも悪くも、男は他人に無関心なのだ。自分みたいな人間もいれば、自分よりも幼く見えるのに長いこと森で暮らしている少女もいるだろうと。自分自身にも対外無関心ではあるが。

「……、良い所ですね。涼しいし、空気は澄んでる気がするし……、なんだか健康になったような気がします。とは言っても、まだこの森に入つて来て半刻くらいでしょうけど」

「……………そう」

なんだか返事が素っ気ない。ひよつとしたらここには住んでみないと分からない、不便のようなものがあるのかもかもしれない。自然は見るだけで癒されるものだとは言うが、やはりそれと利便性は伴わないものなのだろうか。そういえば、里に来た時にある程度の食料を買っていったような記憶もある。じゃあなぜこんな所に住んでいるんだろうとは思ったものの、人にはそれぞれ事情というものがある。それは軽々

しく踏み込んではいけないものだという常識が彼の中にはあったので、訊くことはしなかった。

「そう言えば、今度とは言いましたが、次に里に来るのはいつくらいになりそうですか？ 大体でいいので頭に入れておかないと、会えないと思うので」

「来週くらいには里に行く予定だけど、都合が悪かったりするかしら？」

「いえ。毎日暇人なもので」

と、そこまで言い終ったところで、森の先に光が見えた。薄暗い森の中に差し込む光はとても眩しく、なんだかこちら側が闇だと言っているような気すらしたが、紛れもなく被害妄想だろう。そんなことは分かっていた男は目を細めながら森から出た。振り返ると、人形師がこちらを見ていた。森の影に覆われた彼女と、日の光に照らされる自分。そこには確かに明確な境界線があった。本来いるべきところが逆だという気持ち悪さを感じながら、男は小さく手を振り、小さく頭を下げてから森に背を向け里へと向かう。

彼は気付かない。

人形師——アリス・マーガトロイドが、露骨なまでに怪訝な表情を浮かべていることに。